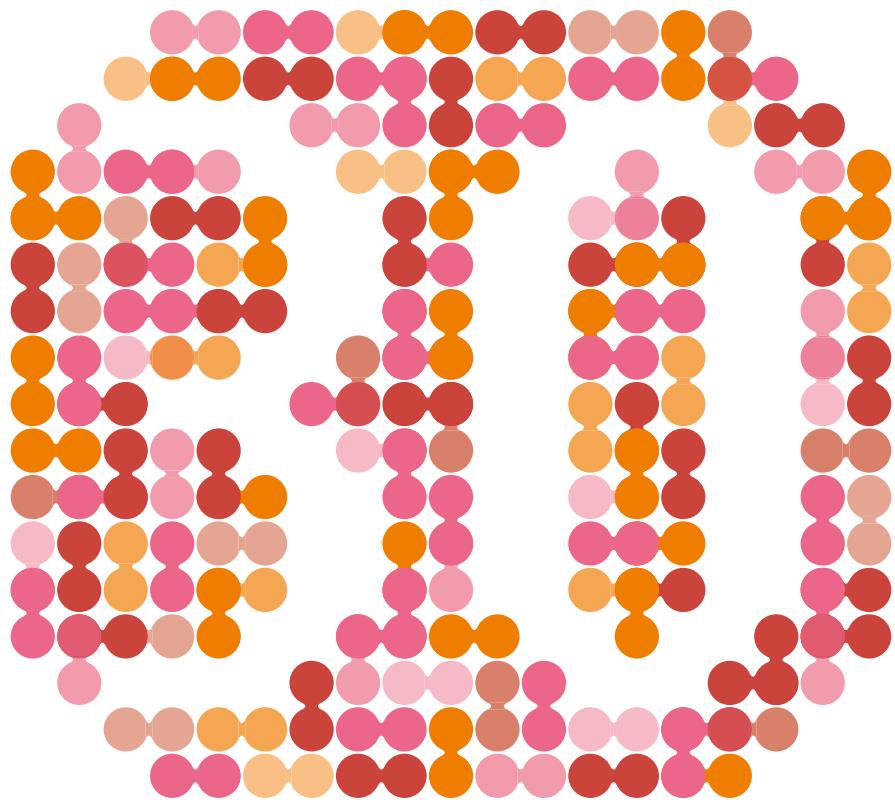


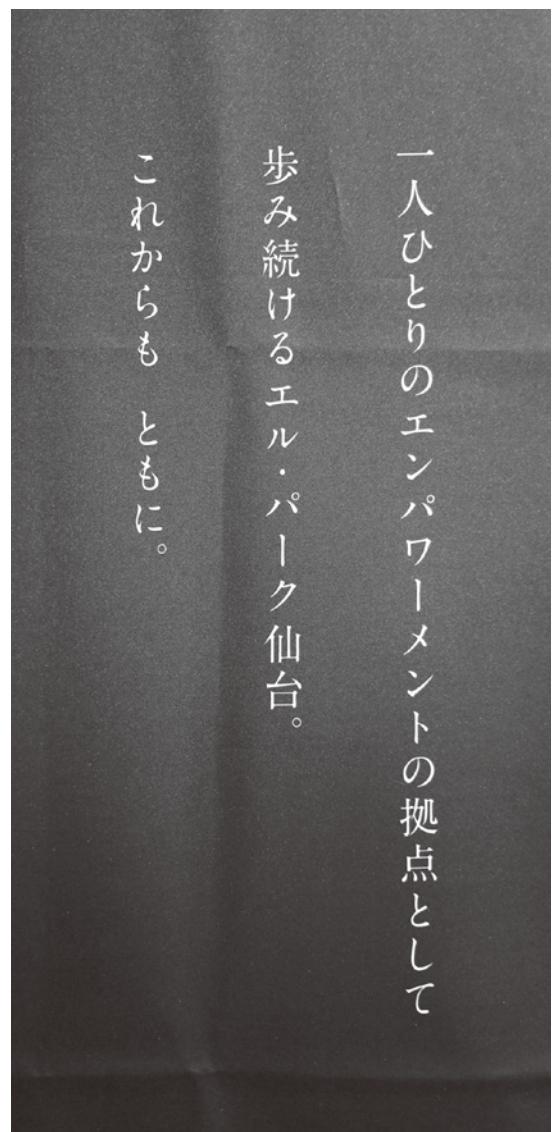
さあ、その先へ！



仙台市男女共同参画推進センター

エル・パーク仙台30周年

2017.3.20



目 次

トーク「さあ、その先へ!」	3
男女共同参画推進せんたいフォーラム2016 「先達に聞く」	15
対談 鷺田清一×遠藤恵子 「足もとから未来志向。」	29
にじいろノート挿絵原画展	36
男女共同参画とエル・パーク仙台のあゆみ	40

さあ、その先へ！

エル・パーク仙台は1987年3月20日、仙台市の男女共同参画センターとして誕生いたしました。こうして30周年を祝う日を皆さまと共に迎えられたことを本当にうれしく、感謝申し上げます。

内閣府男女共同参画局の調査(平成28年度)によれば、男女共同参画のための総合的な施設として位置付けられている施設は、全国に大小含め343あります。そうした施設の中でも、30年の歴史を持つエル・パーク仙台は、全国に先駆けてオープンした、さまざまな意味でお姉さん的な施設と言えます。

男女共同参画の専門施設としての開館時期が早かったことはもとより、託児室、誰でも予約無しで使える広い打ち合わせスペース、市民活動に欠かせない印刷機器、団体専用のロッカーがあって手ぶらで来られる、街中で集まりやすく、交通の利便性も良い。今では全国のどの男女共同参画センター、あるいは市民活動センターでも当たり前になっている、活動支援の基本的な機能の原型が、既に30年前に提供され、全国のセンターに大きな影響を与えてきました。

戦後70年を過ぎても、日本の女性の地位や平等の問題は、解決したとは言いがたい状況にあります。それでもこのテーマに関わり続ける女性たちの力や知恵は、誰から、どんな体験から生み出され、そしてつないできたのか。今一緒にいる人との横のつながりだけでなく、時間を経た縦のつながりが続いていることは、言うまでもありません。

エル・パーク仙台5階のエントランスには、これまでの歩みを思い出していただけるような写真や、ここで活動された約400のグループのお名前を掲示した年表を設置させていただきました。制作に際しては、市民の方々からお話を聞かせていただき、お知恵も拝借いたしました。ぜひご覧いただければと思います。

30周年記念事業として、昨年6月にはせんだいメディアテーク館長の鷲田清一氏と、当財団のアドバイザリー・フェローである遠藤恵子氏との対談、『足もとから未来志向。』を開催、さらに11月には『先達に聞く』と称して、エル・パーク仙台で長く活動を続けてこられた8名の方々から、次世代に伝えたいことをお話しいただきました。あらためて先達のメッセージを聞き、私どもの財団にはそれを伝えていく役割があるということも認識いたしました。そして今日3月20日、まさに開館記念日のイベントが、世田谷区立男女共同参画センター館長の桜井陽子氏と、奥山恵美子仙台市長とのトークです。キャリアも長く、女性問題を語らせたら止まらないお二人のお話とあって、市外、県外から多くの方においでいただきました。

この30年の間に仙台の女性たちは、他都市にない体験を重ねてきました。東日本大震災は、その最たるものです。センターの存続の危機もありました。こうしたことは、他では体験してほしくありませんが、完全に避けられるものではありません。

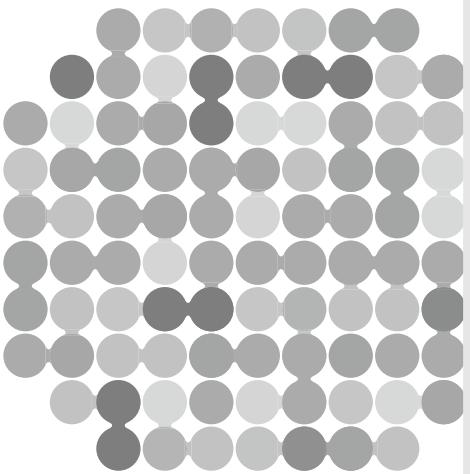
『さあ、その先へ！』。30周年、節目の年のテーマです。皆さまの中には、この30年をエル・パークと共に歩んでこられたグループ、ここをスタートに活動の場を広げたけれど、やっぱりエル・パーク仙台が故郷だというグループ、エル・パーク仙台を使い始めたのは実は最近ですというグループ、そして個人の方々、いろいろな方々がいらっしゃると思います。

今日、私たちが受け取っているものをどんな形にして未来につないでいくのか、共に考えていくことができれば幸いです。

平成29年3月20日
開会あいさつより



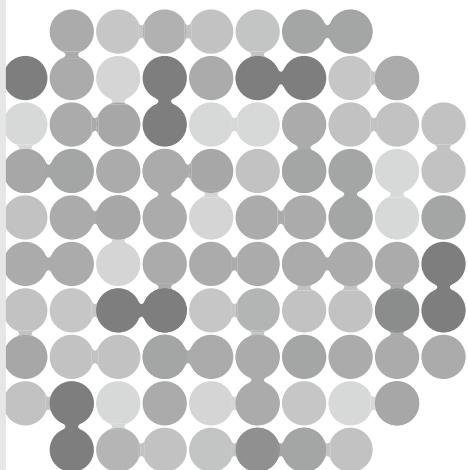
公益財団法人
せんだい男女共同参画財団
理事長
木須 八重子



「さあ、その先へ！」

平成29年3月20日(月祝)

エル・パーク仙台 スタジオホール





桜井 陽子 (さくらい ようこ)

特定非営利活動法人
全国女性会館協議会前理事長
世田谷区立男女共同参画センター館長

1987年に横浜市女性協会(現 横浜市男女共同参画推進協会)に入職し、館長、業務執行理事を歴任。その間、内閣府、文部科学省などの委員も務める。2011年から全国女性会館協議会理事長、2014年から同顧問。2012年から世田谷区立男女共同参画センター館長。



奥山 恵美子 (おくやま えみこ)

仙台市長

1975年に仙台市職員に採用、1993年から市民局生活文化部女性企画課長として男女共同参画を推進。その後、せんだいメディアテーク館長、市民局次長を経て、2007年に仙台市副市長。2009年8月に第33代仙台市長就任。2期務める。



長谷部 牧 (はせべ まき)

株式会社東日本放送
執行役員兼CSR広報部長

1980年入社。編成企画部長、広報室長を経て、2016年から現職。近年、「ビジネスシーンで女性が自分らしく力を発揮するためのサポート」を自身のライフワークとしている。2012年から(公財)せんだい男女共同参画財団理事。



長谷部 まずは、エル・パーク仙台30周年、おめでとうございます。一口に「30周年」と申しましたが、いろいろなご苦労や喜び、それから出会いが生まれたことだと思います。

今日のテーマは「さあ、その先へ！」です。エル・パーク仙台の役割の移り変わりにスポットを当てて、エル・パーク仙台が今後どのような「場」に成長していったらいいのか、皆さまお一人おひとりがお考えになるヒントになれば、と思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、奥山市長と桜井さんに自己紹介も兼ねて「エル・パーク仙台との関わり」についてお話しいただきます。桜井さんには女性センターの全国的な流れなど「俯瞰した視点」も含めてお話しいただければと思います。

エル・パーク仙台ができた頃

奥山 こんにちは。30年前には35歳で、婦人青少年課という課おりました。“婦人”青少年課ですよ。今では信じられないですね。当時、全国には婦人会館というものがあったのですけれども、仙台市には女性のための施設は無かったんですね。仙台の女性運動は、戦後、全国的に見ても盛んでしたが、その拠点となる施設がなかった。「私たちの市にも欲しいよね」ということで、婦人グループの皆さんたちが、たくさん署名活動をしたり、当時の市長さんに陳情をしたり、いろいろ勉強会をなさったりしました。その運動が5、6年ぐらい続いていた頃、私はたった1人の担当者として婦人青少年課に入って、上司の主幹兼係長さんとたった2人だけの担当となりました。

「女性の拠点施設を建ててください」という要望を聞きながら、「建てましょう」と市長さんが言うまで何年もかかりました。いよいよ建つと決まった時は、私も本当に良かったなと思いました。そしてそれから、ここがどういう施設になったらいいのだろうと考え続けました。

横浜の財団でお作りになった最初の館、戸塚の横浜女性フォーラムがオープンしたのは、エル・パーク仙台開館の翌年でした。「女性フォーラム」という言葉そのままの、広場のようで、明るくて、今でも覚えているのですけれど、普通の施設の階段よりも段差が小さいんですね。「ご高齢の方でも、子ども連れの方でも、苦労なく上がるよう施設全体にバリアフリーを考えているんです」とおっしゃっていて、そういう小さなことの一つ一つに心を込めて作られているのだと分かりました。

仙台ではまだ見たことがないような新しい講座、女性たちの声がいっぱい入った企画を行っていて、趣味や習い事じや

ない、女性の今を考える問題意識がここにはあるなあ、エル・パーク仙台もこんなふうになれば素晴らしい、と思いました。

エル・パーク仙台との関わりと全国の女性センター

桜井 エル・パーク仙台30周年、おめでとうございます。本当に心からお祝いしたいと思います。せんたい男女共同参画財団のみなさま、仙台市のご関係のみなさま、それから支えてくださった市民のみなさまのご尽力がこういう良い形をつくれたのだと思います。

ご紹介いただきましたように、私は、1987年に横浜市女性協会に入りまして、翌88年に横浜女性フォーラムがオープンしました。私どもも、従来の婦人会館のようではない、新しいものを目指していましたので、同じ政令市の仙台市さんがセンターを作られるということで、横浜で建てる際に、意見交換させていただいたことを覚えています。

仙台も横浜も、1980年代後半に開館しましたので、かなり早い時期から女性たちの自立や女性問題の解決、それから女性の地位向上ということを目指してやってきたと思っております。日本の女性センター全体の話をしますと、ご承知のように1975年を国連が国際婦人年と定めまして、第1回世界女性会議がメキシコシティーで開かれました。まさにその、日本の女性問題の解決とか、女性の地位向上に、国が本格的に取り組み始めたのは、こういったところからだったと思います。

日本における女性問題解決、女性の地位向上の流れというのは、外圧、つまり、国連など国からの動きからと、国や地方公共団体等行政の主導によって形作られたことがあります。もちろん地域の女性たちの自発的な活動もあり、活動の拠点としてのセンターが欲しいという高まりもありましたけれども、全国の女性センターの9割ほどが、行政によって作られてきたという経緯があります。そのような中で、エル・パーク仙台もできましたし、横浜にもできたわけです。

また、私たちが拠って立つところの男女共同参画社会基本法ができましたのが、なんと1999年なんですね。まだ20年も経っていません。そして第1次基本計画ができたのが2000年ということで、日本の男女共同参画といいますか、女性の地位向上は遅々としていると言われますけれども、まだまだ歴史が浅いということです。私たちはそのところを自覚しておかなければいけないと思っています。

私が1987年に横浜のセンターに入ったとき、周りの友達に、「あなたみたいな人を横浜市がよく雇った、そんなじや

じや馬はすぐに首になるだろう」って言われたんですけど、どっこい定年まで勤め上げて、結構、組織になじんだと思っています。センターに入ってからもう30年ですからね、男女共同参画センター業界、どっぷりっていう感じです。

「新たな課題を発掘する力」を求められる、男女共同参画センター

奥山 私が桜井さんを評価する理由を、ちょっとお話をさせてください。私は、男女共同参画センターの運営の難しさは、「自分たちのセンターが何のためにあるか」ということを常に考えていなければならないところにあると思っているんです。もちろん、男女共同参画社会基本法に拠って立つ計画などがありますし、基本的には条例で設置目的が定められているので、センターの運営も事業もやろうと思えばそれなりにはできるんです。でも、桜井さんもご苦労されたと思いますが、やっぱり時代とともに、3年前にやって良かったことが5年、6年、7年と続ければ良いというものでもないですね。時代が変わると女性たちの置かれている状況も変わる。そこで新しい課題を見つけて、それを切り拓いて社会に訴え、その解決の方法を一緒に探っていくことができなかったら、女性センターの良さは半分以上無くなると思います。市民センターも公民館も、10年前と同じ講座をやっていたら駄目なんだけれど、とりわけ女性センターというところは、新しく課題を発掘する力を求められる。

それが多分、このセンターを運営していくうえでとても難しいところで、桜井さんはそのことを最初から、常に考えている方だったと思うんですよね。『女性施設ジャーナル』は、桜井さんが所属していた横浜市女性協会が編集発行されていたものなんですが、これが画期的だったのは、今申し上げたような、「今、私たちはどういう問題意識を持つべきか」ということを、日本全国の女性センターに対して問い合わせているんですよね、答えがあるんじゃなくて。ずっとそれを問い合わせ続けて、編集して本にして、毎年発行するという活動ができたのは、残念ながら横浜の財団しかなかったと思います。問題意識を持ち続け、それをリフレッシュするということがいかに大事か、施設運営者としても、私は今でもそう思っています。

震災を経て見えた課題

長谷部 ここからは「センターの課題」についてお話を伺い

ます。

エル・パーク仙台は1987年の今日「産声」を上げて30年という歳月が過ぎました。そして2011年3月11日に東日本大震災がありました。センターの役割や課題の変化を考えるわけですが、私は震災を境にした「震災前」と「震災後」の二つにわけて考えてみたいと思います。震災を経て「違うフェーズ」に入ってきたという印象があるからです。その変化をキーワードで表現すると「『啓発』から『問題解決』へ」といったところでしようか。

「震災後」のセンターの活動を見てみると、東日本大震災の翌年に、「日本女性会議」が仙台市で開催されました。震災時に避難所の運営や、復旧・復興を検討し決定する場にもっと女性が参加する必要があったのではないかということで、この会議のテーマに「決める・動く」という言葉が掲げされました。

また、同じ時期にノルウェー王国から頂いた支援金で「女性リーダーシップ基金」が設立されて、2015年の「企業の未来プロジェクト」の実現につながりました。さらに同年、仙台市で「第3回国連防災世界会議」が開催され、エル・パーク仙台は『女性と防災』テーマ館として、様々な展示やシンポジウムなどを行いました。その中で、桜井さんには「あるってだいじ」というテーマのシンポジウムにご登壇いただき、災害時の男女共同参画センターの役割についてお話をいただきました。

奥山 震災とは何だったのかというと、それまでセンターがずっとやってきた社会と女性の問題を「震災」というとても激烈な切り口で、全部洗い出して総括して、あらためて「問題ですよね」って突き付けるものだった、と思います。長谷部さんがおっしゃるように、プレ震災とアフター震災で、やることが大きく違ってきた印象があるのもそういうところだと思います。

それはとても大きな投げ掛けで、私たちは被災地にある女性センターとして、それに対してどう応えていくかがこれから問われているのだと思います。ただ一方で、この震災というテーマも、長く続けさえすれば良いというものではない。区切りを考えながら、震災を越えてまた新しいステップに上がっていく動きを、女性センターがどう作っていくのかということが、今日のテーマである「その先」という話になるのではと思います。

桜井 震災後、日本女性会議のときに仙台に呼んでいただきまして、会議が始まる前に奥山市長さんとお話ししたときに、

市長から「今、男女共同参画センターの存在を世間に知らしめることを、何かやらなくては駄目じゃないだろうか」と言っていただいて。その後、せんだい男女共同参画財団の木須理事長さんたちとご相談させていただきながら、私、全国女性会館協議会の理事長をしていましたから、その立場で、何かキャンペーンのようなものを展開していきたい、と内閣府や文部科学省へ行って協力を求めたりしました。でも内閣府は、決定的にお金がないんですね。それでせんだい男女共同参画財団の、ノルウェー基金を使ってのご協力をいただきながら、『あるってだいじ』というポスターを、エル・パーク仙台の加藤さんたちにご苦労かけて作っていただきました。このポスターを全国の男女共同参画センターと内閣府や文部科学省等関係各所にお配りして、大災害に直面したときにそれを乗り越えるためにも、平時から男女共同参画センターがその地域にしっかりと根付いていなければいけない、それからセンターは、その地域の人たちから常にあてになるよねっていう信頼感を持つてもらう存在でなければならない、という意味を込めて、男女共同参画センターが『あるってだいじ』というキャンペーンを行いました。

災害時に動けるセンターになるための3つの条件

桜井 2011年の7月、発災の年の夏に、被災地にある男女共同参画センターが、発災時、そして発災後どう動いたのか、センタースタッフがどのような役割を果たしたのか、何ができることができなかつたのかという調査が必要だと思いまして、『災害における男女共同参画センターの役割調査』を行いました。東北の男女共同参画センター13館の職員にインタビューさせていただきました。大変な状況の中で、センターとして支援活動に入れたとか、しっかり動けたという所について、何がそれを可能にしたのか探っていくと、条件が三つあると思いました。

一つは、前例のない待ったなしの判断をせざるをえないのですが、どこかに聞かなければ動けないということではなく、センター自体で判断するという主体性が担保されているということ。

二つ目は、その前提に、一人ひとりの職員にいざというときの判断力が培われていること。男女共同参画センターは開館時間が長く、職員はシフト制で勤務しています。管理職がない時間帯もよっしうあるわけですよ。ですから、職員一人ひとりが自分の判断で動くという、いざというときの判断力が

養われていることが大事なんだと痛感しました。

三つ目は、センター自体が地元の女性グループや支援団体、マスコミなど、地域の社会資源とのネットワークを平時から構築していること。この三つがあった所は、本当にすぐに動けたと思います。その代表が、エル・ソーラ仙台、エル・パーク仙台ではなかったかと思いました。

この、せんだい男女共同参画財団が運営するセンターから、市民グループと連携しての「せんたくネット」のお話ですか、それから、女性の視点を生かした避難所ワークショップですか、職員も被災者であるということを忘れちゃいけないということですか、支援力と同時に受援力ということも大事だということなど、たくさんのこと学ばせていただきました。本当に、仙台からの情報が、全国女性会館協議会のネットワークを通じて、全国の男女共同参画センターに役に立っているということで、心からお礼申し上げたいと思っております。

長谷部 お話にあった三つの条件はどれも大事なことですが、とりわけ一つ目の「センターの主体性」はとても大事だと思います。エル・パーク仙台もそうですけれども、大抵のセンターは、その運営経費が自治体から出ていますよね。

奥山 担当課がしっかりとしていると、何をやるにも「担当課にお伺いを立てなきゃいけない」となる。もちろん普段は担当課に相談し、連携してやっていくべきものです。けれども、何か大きなことが起きたら、とにかく私たちは仙台市の職員としてやるべきことが山のようにありますから、担当課の職員もセンターからの相談等に対して「今、そんなことで騒がせないで」となりがちなんですね。3.11の時に仙台市の男女共同参画課がそうだったという意味ではなく、そうなりやすい。そのとき、センターの現場として何をするべきか、現場自体が考えられるということは、とても大事です。市長も含め、担当課は普段から現場にそういう自立性を与える、それを育てていかなければいけないということをちゃんと自覚していないと。何でもコントロールしようとするという問題が、行政にはあります。

でも横浜でも、ときとしてコントロールしようとする市役所と戦わなければならないこともありますでしょう。センター間で意見交換したり、いろいろなネットワークを組むことで、市役所をどう動かすか、市長をどう使うかという情報を共有できるようになるだけでも、すごく違う。多分それがネットワークの一番のメリットかもしれませんよね。

センターのマネジメントと評価

桜井 そうですね。私たち、男女共同参画センターの職員は女性の地位向上とか、女性問題の解決という事業に取り組みたいと思って、この仕事に就いている者が多いので、どんな事業をしようか、どんなサービスを市民に提供しようかということは、すごく一所懸命に考えるんですが、この組織をどう維持していくかとか、行政とどういう関係を築いていくかという、マネジメントのところがすごく下手なんですね。自分でもそう思いますし、日本の非営利組織全体をみてもそうだと思います。

それで私、ここ10年ほど思っているのは、やっぱり自己評価をちゃんとしないと駄目だなあと。男女共同参画センターはともかくミッションが大事で、それに向かって突き進むというのが、どうしても私たちの行動様式の中に入ってしまっている。でも、事業の効果、効率、成果はどうなのか、どれだけの予算を使ってどれだけの人にサービスを提供したのか、どれだけの人に役に立っているのかという成果をきちんと出して、評価をしていかなければならない。「良いことをやっているんだから効果や効率は二の次でいいじゃないですか」となりがちなんですが、その良いことがどれだけの人に伝わっているのかということをちゃんと考えていかないと、男女共同参画センターはなかなか世の中に理解してもらえないというのが、最近、本当によく思っているところです。

奥山 センターはあるから安泰っていうものではない、っていう経験は随分しましたよね。

桜井 はい。もう、おっしゃるとおりです。男女共同参画センターには、設置の根拠法がないんですね。男女共同参画社会基本法には、男女共同参画センターを都道府県レベルで作ることとか、全然書かれてないんですよ。ですから首長のさじ加減一つで、センターは要らないと言われてしまったり、大阪がいい例だったかと思います。図書館には図書館法というものがあり、博物館も博物館法があります。それから、配偶者暴力相談支援センターも根拠法がありますが、男女共同参画センターについては、それがないのがやっぱり大変厳しいと思っています。だからこそ、それぞれのセンターをお使いいただいている市民の方たちと一緒に、ここをどういう方向に持っていくか、しっかりと、絶えず考えながらやっていかないと駄目だなと思っています。

センター同士の相互支援システムへ

奥山 日本女性会議の時、私は首長として、震災後の流れの中に、危うい存在である男女共同参画センターが認められる、ある方がいいと思ってもらえるチャンスがたくさんあるんじゃないかな、というお話をしたんですよね。

桜井 はい。それが『あるってだいじ』というキャンペーンにつながりました。その後、木須理事長さんたちのご協力を得て、大規模災害など“いざ”というときに被災地域の男女共同参画センターを全国のセンターが支援できるような仕組みを、平時からちゃんとつくるおこうということで、相互支援システムというものを作りました。発災した時に、スマートフォンでも情報共有ができるというものです。

全国女性会館協議会がハブになって、被災地のセンターとそこを支援したいという全国のセンターをつないでいくという仕組みです。こういうことは、平時からやっていかなければならないと始めていたおかげで、一昨年の広島の土砂災害のとき、それから昨年の熊本の大地震のとき、広島にも熊本にも、それぞれ県や市の男女共同参画センターがありましたので、情報共有をしながら支援の在り方を考えることが、まあまあできたかなあと思っています。それは仙台と一緒にだからこそ、できたという実感があります。だから、大変感謝しています。

奥山 でも、誰かが芯棒を立ててくれないと傘も張れないのと同じで、みんな理屈ではつながることが良いことだと分かっていても、「この指止まれ」って言う誰かがいないと、なかなか難しい。中心に全国女性会館協議会があったから、そこにみんな集まってネットワークができたんです。

男女共同参画センターと女性活躍推進

長谷部 これまでお話しいただいたことへの個人的な感想になりますけれど、奥山市長がおっしゃったように「いつも課題を見つけていく」という姿勢が大事だということ。そして、男女共同参画センターが自立して、自分たちで動かしていく力を持っていなければならないということが、私はとても大切なことだと思いました。今後活動を続けていく上で大事にいかなければならないポイントだという気がしました。

さて、今日は『さあ、その先へ!』というテーマです。ここまで

の話を受けて、お二人それぞれにお話を続けていただきたいと思います。

奥山 女性たちにいろいろ新しい課題があると思います。安倍総理が男女共同参画を本気で進めるとは信じられないのですが、現実として、今、結構、目に付くものの一つに、女性活躍推進法がありますよね。さまざまな分野の女性の役員を30パーセントにするともおっしゃっていて、それはそれで行政は進むというのが恐ろしいことですよね。

桜井 そこはちゃんと見なければいけませんよね。というのは、安倍総理が言う女性活躍推進というのは、女性の活躍をもって地域経済を活性化させるという経済政策ですよね。女性の活躍が目的ではなくて、地域経済の活性化のために女性を“活用”したいだけではないかというようにもとれてしまう。女性の活躍推進に向けては、内閣府だけでなく、経済産業省あたりからも大きなお金が出てきますから、それはもちろん男女共同参画の推進に向けて使わせていただいたら良いと思います。しかしこれに何の躊躇もなく乗ってしまうのは、いかがなものかとは思いますね。

それから、ジェンダーギャップ指数*が世界144か国中111位で、年々順位が落ちています。大体先進国と言われている国は10位内とか20位内に入っていて、つまり男性と女性の格差が小さいのですが、日本の場合には経済大国でありながら男女格差が大変大きい。私、男女共同参画を目指してずっと働いてきたつもりなのですが、この数字を見ると、「何をやっていたんだろう、私たち」って腰が砕けちゃうっていうか、元気が出なくなってしまいます。

こういう状況だからこそ方向を見据えて、女性の地位向上、女性問題の解決、あるいは男女格差の解消という課題に、しっかりと取り組んでいかなければならないと思っています。国は女性の活躍推進とか言っていますが、男性の片働きを主流とする社会の仕組み自体を大きく変えようとする政策をとっているとは思えない。だから社会が変わることを待っていたら、いつになるか分からない。なので、エル・パーク仙台、エル・ソーラ仙台でなさっている女性のリーダーシップを醸成

*世界経済フォーラム (World Economic Forum) が毎年発表する、各国における男女格差を測る指標 (Gender Gap Index:GGI)。経済、教育、政治、保健の4つの分野のデータから作成される。



するといった事業を、しっかりやっていかないとまずいなあと思っています。

奥山 やっぱり、女性たちがいろいろな企業の中で、現場のやり方を決めていけるポジションに就くということは、とても大事です。上場企業の役員も30パーセントと言わず、50パーセントにもなってほしいと思いますし、この社会の中堅層に、もっともっとたくさんの女性たちが入ってほしいなあと思いますね。だから、財団で今進めていただいている、仙台の働く女性たちを応援するいろいろなプログラムにも、たくさんの人に参加してほしいと思います。

当事者からの発信が難しい時代

奥山 ただこの頃、政治の立場として難しいと思うこともあります。そもそも女性センターが作られたときも、女性たちがいろいろな学習活動などをして、自分たちがこれを望んで、署名活動や運動をして、それが大きな力になって、エル・パーク仙台のような施設ができたというお話をしました。ですが今の、格差が非常に大きくなっている社会で、とりわけ女性にそ

の格差のしわ寄せが来ていることは、政治的な動きや経済的な統計を見ても明らかです。その当事者の方々が、自分たちで女性センターを作った頃の女性たちのように声を上げるとか、運動を立ち上げるのはなかなか難しいですよね。

男女共同参画センターの今までの30年は、少なくとも当事者の女性たちが核にいて、まず声を発して、それに賛同する人たちなどが、ネットワークを組みながら自治体や国に提言したりして、少しずつ押し上げてきたと思うんです。けれど今、この格差の中の下位グループと言っていいのかどうか分からないけれど、必ずしも当事者からそういう問題が出てこないかもしれない。その中で、どうやってこれを全体の問題にしていくか、今までとはまた違った進め方、運動論が必要なのではという気もするのですが、どうでしょう。

居場所と活躍の場をつくる

桜井 おっしゃるとおりだと思います。私がこの後申し上げたいと思ったのは、それこそソーシャルインクルージョン、すなわち社会的包摂ということで、誰をも排除しない社会をつくるということです。別の言い方をすると、「誰にでも、居場



所と活躍の場所をつくっていく」というのが、男女共同参画センターの大事な仕事になっていくのではないかと思います。

市長がおっしゃるとおり、今の格差社会で、相対的貧困率が高い母子家庭のお母さんたちに、自分たちの意見・要望を男女共同参画センターで出してください、男女共同参画の活動をしましょうと言ったって、日々の暮らしに追われてそれどころじゃないですよね。男女共同参画センターって、一昔前の、活動している女性たちが集まる場にとどまっていてはダメだと思っています。生きにくさを抱えている方たちにとっても、その方たちが生きやすくなるような、何か情報を提供していくとか、居場所をつくっていくとか、相談をちゃんと受けるとか、何か力が出てきて安心と感じられることを、まずセンターで作っていくことが大事だと思います。これが、今、男女共同参画センターの大事な仕事なのではないでしょうか。DVの被害を受けた女性たちにとって安心できる場所を作るとか。それからニートといわれる若者の就労支援として、厚生労働省がNPOと組んで若者サポートステーションというものを全国に展開していますけれども、その参加者は男性が多く、女の子たちはなかなか行けないんですよね。彼女たちが、男女共同参画センターの講座だったら参加できるとか、相談に来られるとか、そういう場所をつくることが必要なのだと思っています。

外に出てつながっていく

奥山 私はこのエル・パーク仙台の後に、せんだいメディアパークという素晴らしい施設も作ったんですよね。立派な施設には、良いこともあるけどなかなか難しい問題もあるなあとと思いました。良いことのほうは、一つの大きなテーマ性を持った施設を作ると全国から市民の人が来てくれます。理由は、その施設が出しているメッセージに共感するので、きっとそこに行けば同じ気持ちを持っている人に会えると思うからです。多分、エル・パーク仙台に来る人もそうではないかと思います。横浜から仙台にいらっしゃった人は、横浜のセンターで出会っていたような人たちと仙台でも会いたいけど、どこででも会えるわけではない。じゃあエル・パーク仙台の講座に行ってみれば、そういう人と会えるんじゃないかなと思って来る。それはとても良いことなんだけど、一方で、その施設の職員は人数に限りがあるので、施設に「来てください」だけになる。でも、今おっしゃったような居場所づくりって、多分、「来てください」だけでは難しい。やっぱり地域に出て行って、地域

にどんなグループのどんな活動があって、どういう所だったら本当に敷居が低くて、というようなことを、仙台と言っても広いから、その地域ごとにいろんな所で会って、民間の力も借りていかなきゃいけないと思うんです。でもそういうことのために外に出ていく力が職員全体に無くなってくるんですよね。立派な施設を預かっているものだから、その維持管理と施設にいらっしゃるお客さまのお相手だけで、職員も手いっぱいになってしまって、なかなか外に出て行きにくくなってしまうんです。メディアパークを管理しているときに、「ああ、良い公共施設ってやっぱり弊害もあるなあ」と思ったんです。

桜井 職員の力量が問われるわけですが、力量を上げていくためには職員一人ひとりが頑張るということだけではダメで、やはり職員が力量を向上させる仕組みを組織自体がもっているかということが問われるべきだと思います。ところが、全国の男女共同参画センターをみると、仙台や横浜のセンターなど一部を除いては、そのあたりが十分ではないので、本来職員が担うべきことをボランティアに任せてしまうというセンターもあるように思います。男女共同参画センターの多くが、口を開けば予算が足りず、人が足りずってわけでして。そこをどう乗り切るか、厳しいところですよね。それについて、私はボランティアに頼るというのはあまり良くないって思っています。

奥山 桜井さんは、あんまりボランティア頼みになるのは良くないと、ずっとおっしゃっていますよね。

桜井 それをやってしまうと、男女共同参画センターで働くということが職業として成立しなくなるからです。ボランティアの協力を得るということもあってもいいのですが、その場合にはボランティアの自発性というものが最大限担保されなければいけなくて、センターの下請けとして無償で使うことではないんです。その辺はしっかり分けて考えなければいけないと思っています。

長谷部 市長が「外に出ていく力」ということをおっしゃいました。私はせんだい男女共同参画財団の理事をさせていただいており、財団の事業を拝見しています。例えば『企業の未来プロジェクト』の運営にあたり、財団の職員の方が企業に出向いて直接企業の担当者と交渉したり、話を聞く中でニーズを掘り起こす。またそのプロジェクトに対する外部からのフィード

ドバックをもらう機会が増えたように思います。こういう機会は、職員の方にとって様々な気づきを得るチャンスでもあると思います。このように具体的なプロジェクトを通して外とつながっていく回路ができるることはとてもいいことだなと思います。このようなことを、男女共同参画を進めていくセンターの在り方として、きちんと位置付ければ、活動の方向性がはっきりしていって、もっと活躍の可能性が広がるのではないかという気がしています。

対等な関係性を保つ

奥山 俗に「お役所仕事」といって、行政はある種の権限と財源を持っていましたから、あまり外に頼らなくともできてしまいます。市民の人たちからよく旧態依然と言われますけども、財団も気を付けないと、その旧態依然に引きずられる。予算を付けてくれるのが役所のほうですから、その中で自立性を保っていくのは難しいことですね。お金をもらっているけれども、媚びないという。ネコみたいに、養ってもらっているんだけども家主をあんまり尊敬しない。イヌ型になっちゃいけない。やっぱり男女共同参画センターはネコ型でいかないといけない。

桜井 お金を出す側、もらっている側ということは、そこにはもう絶対的な力関係が生じるわけですよね。双方がこのことにどれだけ自覚的であるかが問われるというわけですね。例えば、行政にしても男女共同参画センターが市民グループに助成金とかお金を出して何かと一緒にやるときは、お金を出す側は相手と対等な場にいると思っていても、お金や情報をたくさん持っているということは、下駄を履かせられていることだから、どうしたって上から目線になる。そこのところにどれだけ自覚的でいられるかということですね。それから、市民グループと対等にやっていくことを担保するときには、その市民グループが何をやりたいのか、どのようにやりたいのか、その自発性を、最大限に大事にしなきゃいけない。そのグループがやりたいことができるようになるために、下支えをするのが自分たちの仕事っていうぐらいに思っていないとまずいんじゃないかなと思います。どこと組むかは、センターのベクトルと合った所にすればいいわけですよね。市民グループが自分たちがやりたいことをできるように力を付けるのを支援するということが、中間支援組織であるセンターの仕事なのではないかと。市などの行政とセンターとの関係は、それを応用問題

のように考えたらいいかなと思いました。

最後に—さあ、その先へ！

長谷部 さて、今日この会場には、長年エル・パーク仙台を活用し活動してらっしゃる方々や、つい最近来るようになったという方々など、いろいろな立場の方がいらしています。今SNSが発達したりして、グループを作ることは割りとやすくなつてきましたけども、私個人としてはグループとグループの間がとても遠いような感じを受けていて、このエル・パーク仙台とエル・ソーラ仙台のような施設がそれをつなぐ場にもなってもらえるといいなと思っています。「ここに来ると新たな発見がある」「ここに来ると普段は全然接点がなく、話すこともなかつたような人と話せる」とか、何かそういう場になつていいなと思っています。

それでは最後にお二人から一言ずつお願ひいたします。

桜井 せんだい男女共同参画財団が始めた『決める・動く』という事業について、職員の方に「どうだった」って聞いたら、多分こういう事業がなければ出会わなかつた方たちがそこで出会つた、とおっしゃっていました。例えば自治会や町内会とか、私たちからすれば普段なかなかお付き合いのない地元の団体と、例えばシェルターの運営や相談をやっていたり、地域の子育て支援をしているといったグループは、これまで同じ研修や講座を受けたり、ワークショップをやつたりということはあんまりなかつたのが、女性と防災まちづくりの講座『決める・動く』で出会えたと。これこそ男女共同参画センターの、『さあ、その先へ！』を感じさせる事業だと思いました。

全国女性会館協議会では、4年間続けて「男女共同参画センターはどんなグループと普段付き合っていますか」というアンケートを採ったんです。そうしたら、地域の女性グループとか、子育てグループとお付き合いがあるセンターはすごく多いんです。でも、町内会や自治会社会福祉協議会とかボランティア協会などとのおつきあいがあまりないんです。しかし、防災となつたら、そうしたところとの付き合いが必須になります。

男女共同参画センターはこれからはそういう所からも、『あるってだいじ』と言われるような、男女共同参画センターってあてになるよね、あそこへ行けば、何かこれまでと違った角度でものが見えるようになるかもしれないとか、元気が出るかもしれない、課題解決の方法が見つかるかもしれない、と言つ

でもらえる存在になっていく、そういう方向での事業が必要なんだと思いました。

奥山 今の桜井さんの話で、テーマ性があるものと、広く平面でつながっているものの接点をどう持つかが大事ということは、本当にそうだと思います。仙台市の施設の中にも大きく言うと二つ、タイプがあるわけですよね。一つは、男女共同参画センターとか市民活動サポートセンターのようなテーマ型の施設。もう一つは、市民センター、いわゆる公民館のような、地域の活動の場、地域拠点としての施設。今、本当に地域ごとにいろんな問題が起こっています。例えば高齢者の問題は、それを解決していく中で、この社会で女性の置かれている立場が、また改めて浮き彫りになってくる。特に、問題を解決する力を地域ごとに集合することを求められていると思うので、そういう意味で、テーマ性のあるものと、平面の場でつながったものとが接点を持つという方向性があると思いました。

あとはやっぱり、半官半民で設立されている男女共同参画センターが、どうやってもっと民間と近づき得るか。民間の動きには新しい可能性があったり、若い人が関わっていたりするので、そこと一緒にやっていけることが大事だと思います。

そういう意味では、どうやったら若い世代の人たちに、男女共同参画センターに足を踏み入れる経験をしてもらえるの

か。私は、時々、大学生とお話しするんですけど、防災についての講座に行ったことがあるとか、高齢者の問題について勉強したことがあるとか、ボランティアをやったことがあるという学生には、たまに会うんです。でも、この3年間で「男女共同参画センターに行ったことがある」という大学生はいなかった。どこかにはいると思うんですけども。若いときに自分には関係のないものだと思ってしまうと、一生そうかもしれないで、どうやったら若い世代の人たちに「関係ないことじゃないよ」ということを伝えられるか、私自身の問題意識として持ちたいと思います。今若い人には、ごみの分別のし方を教えていて、これとこれは一緒にしちゃ駄目とかやっているんですけど、その中にどうやって「男女共同参画センター」という単語を潜り込ませるか、頑張りたいと思います。

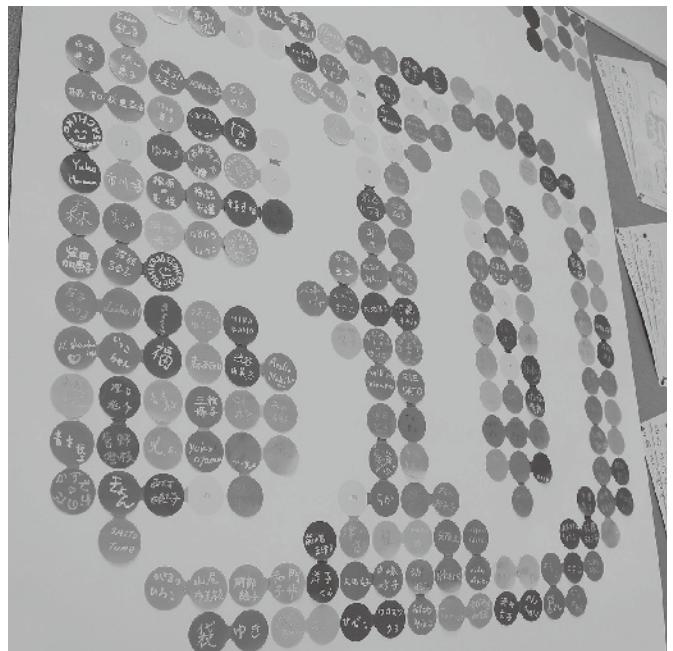
長谷部 今、奥山市長から「若い人たちとのつながり」という課題をいただいたと思います。せんだい男女共同参画財団の皆さんと一緒に、今日お集まりの皆さんにもご協力をいただいて、若い人たちへの広がりが果たせるようになるといいなと思います。

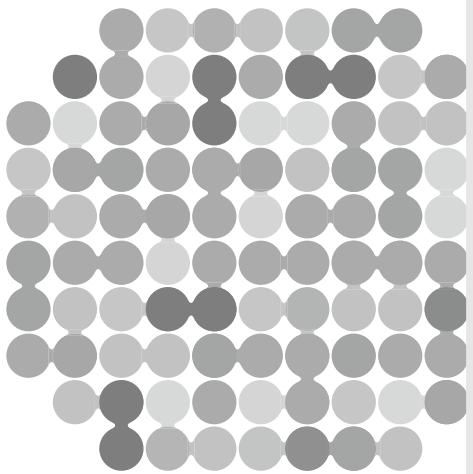
今日ここで提示された課題や解決しきれなかった何かがあるとすれば、それをこの後も胸に抱き続けていてくださいて、継続して関心を持っていただければ、これに勝ることはないと思っております。本日はどうもありがとうございました。



30年、共に歩めたことを喜び合い、「その先」への思いを語り合う

交流会





エル・パーク仙台30周年スペシャル
**男女共同参画推進
せんだいフォーラム2016**

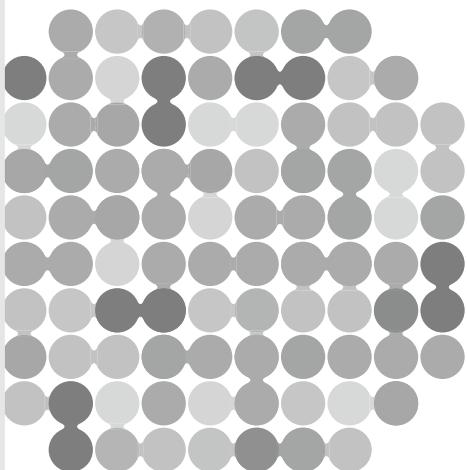
平成28年11月17日(木)～20日(日)

「先達に聞く」

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

平成28年11月20日(日)

エル・パーク仙台 スタジオホール



「自分の得手を活かす」

天野 清子（あまの・きよこ）さん

21世紀をひらくみやぎ女性のつどい・共同世話人

企業を定年退職した年、北京で開かれた国連第4回世界女性会議NGOフォーラムに参加。それ以来、実質的な平等を阻んでいる性別役割意識の解消に取り組んできた。すべての人が生き易いジェンダー平等な社会、格差のない男女共同参画社会の定着を目指して活動している。



選択と決断

わたくしの人生の節目で出会った二つの選択と決断を話します。大学を卒業する頃、わたくしはこれから何をしていいべきか、わからぬでおりました。そんな時、一つの新聞記事を目にしました。女性問題を扱ったシリーズだったのですが、その最後のところで、ある大学の先生が、「まだまだ社会の壁は厚いけれども、これから女性は、自分の得手を活かして頑張りなさい」というエールを送ってくださいました。わたくしは、この言葉がとても深く胸に残りました。そして、好きだった演劇の道に進もうと思い、民間放送劇団に入り、ちょっぴりギャラをもらって、生きがいを見つけておりました。その頃目の前に現れた男性と結婚を考えるようになりました。ですが、彼はわたくしに、主婦として家庭に入ることを望みました。その頃は、男は外で働き、女は家庭に入るということが一般的でした。しかしわたくしは、結婚によって男性は自分の生き方を曲げたり変えたりすることはないのに、女性だけが姓を変えたり、自分が蓄積したものを活かせないのはおかしいと、強く思いました。それで、何度も話し合った末、その結婚は選びませんでした。その後、「東京生まれ」という言葉の得手を活かして、アナウンサーの職に就きました。そして、職場結婚をいたしました。当然、その時の約束ごとは、「それぞれの生き方を尊重しよう。そして、協力しながら家庭をつくろう」ということでした。

会社の仲間とともに

仕事に就いて10年目、子どもも産まれて、ますます仕事に生きがいを感じていた頃、突然、アナウンサーから事務職への配転命令を受けました。当時、わたくしの会社だけではなく、どの企業も「合理化」というのを進めていて、その矛先は、女性労働者に向けられていました。経営者団体から、知らない人が送り込まれてきたり、「腐ったリンゴはいらない」などという、侮蔑的な言葉が囁かれていた頃でした。社員の女子アナウンサーを一方的に職場から追い出して、そのあとには、1

年契約で3年まで勤められるという嘱託制度を導入してきたのです。わたくしは仕事に誇りをもち、「これからいい仕事をしよう!」と思っていた矢先でしたので、この命令には納得できませんでした。そして、会社の仲間たちも、「これは、女性労働者すべてにかけられた、『若いうちだけ働けばいいんだ』という働く権利を奪うものだ」ととらえて、「不当配転撤回」の裁判闘争にふみ切りました。もちろん、夫はわたくしの決断を支持してくれました。会社との交渉は5年かかりました。裁判所の和解命令を受けて、わたくしは元の職場に戻ることができました。でもこれは、民間放送に働く仲間、そして市民の方々の幅広い応援、労働組合の支援を受けてできたことでした。その時わたくしは40歳でした。それから10年はアナウンサーの仕事に、そしてそのあとは自分の得手を活かして、ラジオ報道の分野に進み、定年までラジオ報道デスク、そしてラジオ番組制作にあたってきました。この仕事を通じて、少しあは会社に、ひいては、社会に恩返しができたと思っております。

生きる喜びを支えるもの

わたくしの二つの決断を支えたのは何だったのか。それは長い間日本の女性たちが求め、叫び続けてきた“一人の人間として扱われる権利”を保障した「日本国憲法」でした。24条「婚姻は両性の同意にのみもとづいて成立し、夫婦は同等の権利をもち、相互の協力により維持されなければならない」。そしてもう一つ、14条「すべて国民は、法の下に平等であり、人種、信条、性別、社会的身分または門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」という条文です。今、「憲法を改めよう」という動きが急ですが、この、基本的人権の尊重、主権在民、そして平和主義、この3つをゆるがせにしてはなりません。わたくしの時代と現在では、働き方も社会環境も違うかもしれませんのが、自分の蓄積を活かしながら、結婚する・しないに関わらず、自立を求めてつ社会とつながることは、生きる喜びなのです。それを支える「日本国憲法」をわたくしたちは守っていかなければならないと思っております。

「リーダーを育てる」

渡辺 紀（わたなべ・のり）さん

ガールスカウト宮城県連盟第10団・団委員長

ガールスカウト宮城県連盟入団以降、少女一人ひとりの力を伸ばす活動に長年携わり、1978年に10団の団委員長となる。その後、支部役員などを経て、「少女と若い女性が自分に自信を持ち、生き生きと活動できるように、見守るのが役目」との考えのもと、現在も活動を続けている。



少女一人ひとりが持つ無限の可能性

みなさま、こんにちは。ガールスカウト宮城県連盟の渡辺紀と申します。「こういうところでお話するような人になってください」と言って、子どもたちを育てるような団体です。わたくし自身、ひとの前でお話するということがとっても苦手ですけれども、お話しさせていただきます。

わたくしたちガールスカウトでは、少女一人ひとりがもつ無限の可能性を引き出すために、体験による学びを重要視しております。さまざまな分野のプログラムと、異なる年代、価値観の違う人たちとの関わりの場を提供することによって、どんな状況においても、自分で考え、物事を決定し、行動を起こしていく力を育んで、社会において変化をもたらすことのできる少女になれるように育ってほしいのです。それがガールスカウトの目的で、少女の力を伸ばすことを最優先としております。本当にそのことを力強く思って育ってくれるスカウトたち。子どもたちのことを「スカウト」と言います。

キャンプが育む仲間意識

今、このことに重きを置ける子どもたちが少なくなりました。というのも、そのように思う親御さんたちが少ないので、現在、本当に少ない人数で楽しんでおります。

いろいろな役割を平等に経験する機会が与えられて、そして自分たちで何とかしようとする力がつきます。例えば、重い荷物を工夫してみんなで運び、物事を進めるときにはみんなで話し合って民主的に決めるなど、さまざまな挑戦の積み重ねにより、自ら考え行動する力、高いコミュニケーション能力が培われます。さらに活動を通して日本、世界中に仲間の輪が広がります。

キャンプには毎年参りますけれども、そこでパトロールを組みます。7~8人のグループの中からパトロールリーダーを出して、話し合いによってパトロール名を決めて、キャンプ生活をします。だいたい2泊3日、3泊4日は野営をいたしますので、外でのテント生活をいたします。そのときはやはり、どん

なに自分の意見と合わなくても、まとまるのです。というのは、キャンプは外でやりますし、真夜中にお手洗いに行きたければ、やっぱり誰か仲間と一緒に行っていただかないと、とても怖い思いをします。ということがあると、仲良くなるように、自分たちでとても工夫します。このような様子を見ておりますと、本当にこれは、子どもたち、自分たちが持った思いがそのような時は出るものなので、頼もしく思っております。

備えよ常に

挑戦の積み立てによりまして、自ら考え行動する力や高いコミュニケーション能力、独りよがりではないリーダーシップが培われます。そして、活動を通して、日本、それから世界に仲間の輪が広がっております。

常に心の中においているのは、「備えよ常に」ということです。昨今本当にどこに行っても地震は起きます。そのようなときも、「備えよ常に」をモットーに動けるように活動しております。

それから、4年後、2020年ですけれども、これは東京オリンピックがある年です。日本連盟が100周年になります。宮城県連盟も50年近くになります。なんとかそれまで楽しく、たくさんの方たちが集まって大きな友情の輪が出来ることを、わたくしどもは望んでおります。

「心豊かに」

門井 和子 (かどい・かずこ)さん

生涯一主婦、一市民 (元・翔の会1993年—2014年)



翔の会は、「国際交流と平和」をテーマに8名が集い、継続してきたボランティアグループ。仙台姉妹都市の交流応援等の行事に参加。国内では仙台での日本女性会議、国連防災世界会議「女性と防災」テーマ館の運営にボランティアとして関わった。

「国際交流と平和」を掲げて22年

わたくしのグループは、一昨年解散いたしました。グループ結成当時は、定年退職をした者同士8名集まりまして、この間、この場所で学習してまいりまして、「国際交流と平和」という項目を掲げながら、草の根活動、ボランティア活動を続けておりました。22年間頑張りました。

仙台国際空港ができました折に、「これから女性は世界にも眼を広く向けよう」という主旨で、宮城県で有志の女性を募り、海外研修するということが毎年継続されており、その時のメンバーが母体となっています。

国際線の定期便がたまたま韓国であったということで、紺のやうなものを感じております。わたくしは現在86歳半、やがて90歳です。仲間の皆さんも定年退職して、子育て、姑さん仕え、田舎の生活、兼業主婦、第一線の公職者などいろいろと経験後、相互交流を深めました。あれから22年、もう仲間の大半は亡くなりました。

目を閉じると…

「国際交流と平和」と一口に申しますけれども、難しく考えずに手の届く範囲で現在も続けております。実はわたくしは引揚げ者です。「引揚げ者」という言葉は既に死語のようなのですが、日本の敗戦で、リュック一つで無一文、親に従って日本に帰国して今日に至っております。

目を閉じますと、今でも日本の軍隊、隊列の汗のにおい、連合軍が進駐して、今日は警察・軍隊が解体、明日は、全京城府内の小学校、中学校、高等女学校、専門学校、帝国大学等官公庁すべて廃止という経験。日本人としては少ないと私はいますが、その荒波を受けました。牛・馬を乗せる貨車にすし詰め状態で、日本へ戻ってまいりました。一人だけではあります。大半はもう既に亡くなっています。

ボランティアに関わったのは、韓国が遠い「ふるさと」の一つだと感じるからかもしれません。ぬくもりを感じております。

世界各地へ

世界に眼を向ける同じグループで、ボランティア活動を入れながら、みなさんの大好きな旅も各自で入れながら、自由に活動しました。その行った先のことも列挙したいと思います。韓国は、ソウル、板門店、済州島、慶州に行きました。慶州は、ご存じのように古い都で、慶州近郊にある「ナザレ園」に伺つてまいりました。「ナザレ園」は戦時中に、日本から韓国人の妻となり、韓国人の夫と生活、一緒に暮らした方々が、向こうに渡っておられ余生を送っておられるところです。

ミャンマーは、仙台には昔、旧日本陸軍第四師団がありましたので、その第四師団激戦の生き残りの人とツアーを組んで、三度ほどまいりました。やはり、涙の物語がございます。

モンゴルにも、仙台で活躍している馬頭琴のバヤラト・サローラさんの故郷に、ツアーを組んで行ってまいりました。モンゴルでは草原でパオを組み立て、パオの中で寝泊まりしました。満天の星の中、先方ご家族様は、日本人との交流は初めてとのことでした。

メキシコのアカプルコは、仙台市と姉妹都市です。そういう縁も得ております。

人間が大好き

30周年という歳月を省みて、やっぱりわたくしの底辺には、人間が大好きということが流れております。

みなさまに“これだけはお伝えしておきたい、伝えたい”という一文がございます。小さなことですが、わたくしの大好きな「心豊かに」という言葉をお贈りして、おそばにおいていただければ、うれしゅうございます。ありがとうございました。

「みなさんと一緒に」

佐川 美恵（さがわ・みえ）さん

政治を考える女性の会・幹事



1984年「託児にんじん」を設立し、その後「託児ボランティアネットワークせんせい」を立ち上げ、代表を務める。「政治を考える女性の会」では、議会傍聴の活動を続けている。エル・パーク仙台が存続の危機に追い込まれた際には、「エル・パーク仙台で活動を続けたい!市民のつどい」を設立し、代表となって活動を牽引した。

はじまりは“託児ボランティア”

1984年ですね、社会学級に育てられたわたくしは、「さあ実践活動をしよう!」というときに、市民センターの託児ボランティア養成講座を受けて、受講生10数名と「託児ボランティアにんじん」を結成しました。“託児ボランティア”というのは、子育て中の母親が学習するとき、子どもを預かって、親、子ども、ボランティア、そして市民センターの職員、その四者の育ちの場としての活動をしていくという認識でした。市民センター、保健所等の託児に、精力的に関わりました。社会学級で培ったノウハウのもと、しっかりと取り組んだように思います。そのころ、専用の託児室はなく、市民センターで代用の託児室をあつらえてやっていました。1987年にエル・パーク仙台に専用の託児室ができることになり、非常に嬉しかったです。

生活者として政治に目を向ける

1990年代に入りまして、仙台市長の汚職事件などをきっかけに女性たちが立ち上がり、「政治を考える女性の会」が発足しました。今年発足23年目を迎えておりますが、試行錯誤しながら今の形になっております。最初の頃は、政治というものはまだタブー視されておりまして、わたくしも遠巻きの方におりました。発足当初から続けているのが議会傍聴です。「政治は暮らしとつながっている」と、よくいわれます。それも、傍聴を通して、実際議員さんたちの活動などを見て実感して、生活者として生活しながら、政治というのに取り組んでいきました。今年23年目を迎えておりますが、一貫して政治に目を向けた活動、そして男女共同参画社会実現のための講座なども行っています。講座は、常に時宜を得たテーマに絞りまして、一般公開しております。

エル・パーク仙台で活動を続けたい!

2005年夏に新市長になり、暮れあたりから新市長が「男女共同参画に消極的である」というような噂を耳にし、女性センターは大丈夫かなという危機感がありました。次の年の1月10日の新聞に、「エル・パーク仙台廃止検討」の記事が出たので、

仲間と話し合って、「エル・パーク仙台で活動を続けたい市民のつどい」を結成しました。3月には長谷川公一先生をお呼びして、「市民協働の“城”をまもる～エル・パーク仙台への恩返し。」という基調講演をいただいて、要望書を市長に届けております。「エル・パーク仙台ってなんだろう」とか「男女共同参画はどうあるべきか」ということなどを、そのとき以来、真剣に仲間と考えるいい機会だったなと思っています。その後、またひとつの見えるかたちとして署名活動がありました。多くの市民の方、多くの女性グループの方のご苦労により、1万4000(人)という署名を集めて市長に届けることができました。それが起爆剤になったのかなと今思うのですが、次の年9月頃に、「エル・パーク仙台の存続」という新聞記事が出て、ほつといきました。それも束の間、1年もしないうちに、エル・ソーラ仙台の縮小が行われたのですが、今でもそのことが悔やまれます。

自分を磨き、仲間とつながる

最後に思うことを二つ申し上げます。ずっと活動を続けてきて今思うことは、“本物はなにか、真実はなにか”ということをしっかりと見極めなければならないのではないかということです。そのためには、自分をきちんと見つめて磨くということ、そして、やっぱり仲間の方と、連携とかネットワークとかつながりを大事にしていく柔軟性をもってほしいなと思っております。

“女性のための”この場所で活動を続ける

もうひとつ、やはりわたくしが30年間続けてこられたというのは、このエル・パーク仙台という安心できる居場所があったからだと思っております。いろいろと世の中が変わってきて、社会もわたしたちも変化していっているわけですが、やはりこの“女性のための”居場所というのは、ずっと消さないで、この灯りを途絶えることなく灯し続けていくことが、必要なんじゃないか、大事なんじゃないかと思っています。と同時に、ここを使って活動しているわたしたちにとって、大きな責任があるのだと、今つくづく思っているところでございます。みなさんと一緒に、また頑張りたいと思います。

「私の原点」

木村 さち子（きむら・さちこ）さん ノルウェーに学ぶ会・代表

1975年読書グループ「なでしこ」に加わり、聞き書き集「語り紡ぐ祖母・母たちの歴史」（2004）を発行。仙台市海外派遣研修参加（アメリカ・カナダ）や、「杜の都女性会議」実行委員などを経て、仲間と「ノルウェーに学ぶ会」を結成し、ノルウェーのリーダー養成テキストを翻訳出版する。



読書グループ「なでしこ」

今日は、わたくしの市民活動の原点でありまして、今もずっと続いております、読書グループ「なでしこ」をご紹介します。そこでまとめられた本、「語り紡ぐ祖母・母たちの歴史」についてお話をさせていただきます。

わたくしたちは40年ほど前から、北山市民センターで月1回、日本女性史の勉強をしておりました。1990年ごろ女性問題自由学級に採用され、グループも「なでしこ」と名付けて、参加することにいたしました。エル・パーク仙台に来て周りの女性たちの活動ぶりにびっくりしました。「わたくしたちはただ勉強していただけだね。どうしようかしら」ということになり、そこから、ただ勉強会じゃなくて“聞き書き”ということをしようという話が上がりました。ちょうどその頃、戦後50年を迎えていまして、もう戦前の、明治とか大正とか昭和の前半ころのことを知っている人たちはだんだん高齢化している。周りにいる親たちから、あるいは兄弟たちからあんまり聞いたことがない。いま遺しておかないと消えてしまう。それで聞き書きをすることにいたしました。しかしやり方がわからなかったんです。幸いにも当時宮城学院女子大学で「女性学」を担当していらした菅谷先生という方に、ご指導いただきました。どうやってお年寄りに近づき、話を聞き出すか、どんなふうに話をもっていくのか、座り方はどうするといいか、真正面じゃなくてちょっと横に座って聞いたほうがいいとか、ちゃんと傾きながら聞くという話を、丁寧に教えていただきました。まず1991年4月から1年にわたって、親や、その母の話とか、そういうものを8人分集めて、原稿用紙5.6枚にまとめて小さな冊子を1冊作りました。

38人のライフヒストリーにある“同じこと”

そういう繰り返しを5年間続けました。知り合いのまた知り合いに声をかけていただいたり、「この方、面白い話を知っているよ」と聞くとそこまで出て行って聴いたり、わたくしたちとしては、知らない人に声をかけること自体勇気のいることでしたし、さらに、どんな経験をしてきたのか聴くことは大変勇気のい

ることでした。だいたい5年間にわたって、約50人の方のお話を集めることができ、「50人分の聞き書きを本にしよう」ということになりました。5冊をさらに読み直しし、手直しし、2004年に『語り紡ぐ祖母・母たちの歴史』が出来上りました。38人のライフヒストリーが入っております。これにどんなことが書いてあるのかを紹介したいのですが、なにしろ生まれた時代も地域も家庭の生活も全部、お一人おひとりもちろん違います。例えばですね、“奉公に行った”とかっていうときは、何かというと、これは無給なんです。戦前の女中奉公って、お給料がなかったと初めて知りました。タダ働きだったんです。使用人はお盆の16日だけお休みがもらえるとかですね。それから、お嫁さんが家事とか家のことを全部やって、お姑さんとご家族は全然なにも手伝わないという、大変な苦労をされたお嫁さんのお話を伺いました。もっと驚いたのは、義理のお義兄さんに、勝手に賃金を前借りされ働きに出されそうになったという人が二人もいたんです。反対に自分で、絶対に女だって自立しなきやと、自分の力でやりたいことを勉強して、手に仕事を就け、職をもつた方も何人かいらっしゃいました。また、これからは女の人だって教育をしていかなきや生活をしていけないというので、家族が学校に行かせてくれた方も何人かいました。

本当に千差万別。ただ、一つ同じことがありました。それは、みんな15年間戦争に巻き込まれたということです。これは、わたくしたちは想像もしていましたが、想像を絶するお話を伺いました。50年前の体験でしたけれども、本当に昨日のことのようにお話をされる方々に、ずっと心の奥に閉まっておいて、でも絶対忘れないんだなということを知ることができました。祖母や母たち、決して歴史の表舞台に出ることのない方々が、明治・大正・昭和という時代を生き、戦後「『平等』という言葉を初めて聞いた」とか、「灯火管制が解かれて電気が灯ってホッとした」という言葉を吐き、そして「戦争はもういや」「こんな経験を二度と、誰にもさせたくない」という強い想い。これが身に沁みました。わたくしたちは本当に感謝をこめてこの言葉を、この本の中に残しました。機会があったら、ぜひお読みいただきたいと思います。

「活動ひとすじ」

三塚 雅子（みづか・まさこ）さん 宮城県女性薬剤師会・会長

宮城県女性薬剤師会は、女性薬剤師の社会的進出や、地位向上を図ることを目的に昭和29年に設立された。会員の職能向上を目的とした研修会開催等の活動を続けている。女性薬剤師の視点を生かしたテーマで男女共同参画推進せんたいフォーラムに企画参加し、他の女性活動グループとの交流も図っている。



女性の活躍を後押ししたい

わたくし、宮城県女性薬剤師会の三塚と申します。わたしたちの会は、昭和29年、先輩たちが、これから女性はいろいろ活動し、勉強しなければという思いで組織しました。当時、薬剤師全体に占める女性の割合は30%でした。でも“タンス薬剤師”と言われるくらい、せっかくの資格を使わないで、主婦業の方々が大勢いました。だから、もっと活躍してもらいたい、社会的に進出してもらいたいという思いから、先輩たちがこういった会を立ち上げたのだと思います。

それから20年が経ちまして、昭和49年頃になると女性の薬剤師は全体の50%ぐらいになりました。さらに平成16年に「50年史」作りを検討した頃には、だいたい60%ぐらいが女性になっていました。けれども、やはり女性ですから、家事や主婦業があったりすると、どうしても外に出ないんですよね。

それともう一つ、わたくしは大学を卒業してすぐに宮城県の職員に採用されたのですが、そのときの上司から「女性が薬剤師の給料を下げている」と言われました。薬局には「管理薬剤師」が必要なのですが、薬剤師の免許を持っている女性が、免許を貸してわずかばかりの給料をもらって、それをお小遣いにしているような方もいらしたので、それが給料調査をしたときに、全体のレベルを下げている、と。上司から「そこを何とかするように。あんたは女性なんだから」と言われたことを、いまでも覚えておりますし、女性薬剤師会の活動に入ったのも、そのことが影響しています。

それと、みなさんもいろいろ体験していると思いますが、職場に入るとどうしても男女差別があるんですよね。わたくしの場合にはまずお茶くみから。今はあまりないと思いますが。そのため、どうしても女性に頑張ってもらわなければならない、そして社会進出してもらわなければという思いでこの会に入って活動してまいりました。薬剤師なら誰でも入れる宮城県薬剤師会の部会として認められ、女性薬剤師の活動を続けてきました。

後輩たちを支えたい

ところが会設立からちょうど60年経った記念の年の平成25

年に、法人の見直しがありまして、そのときに「女性が60%もいるんだから、もう部会は必要ない」ということで、宮城県薬剤師会から部会が廃止されました。けれども、今までやってきた活動を止めるわけにはいかないと、みなさんにお願いをして会費を値上げして、現在も宮城県女性薬剤師会として独立して活動を続けております。

いくら女性が増えても、まだ働く環境は良くならないですし、男性と女性がいると、どうしても男性が優先されてしまいます。これからの人たちを失望させないためにも、わたしたちはこういった活動を続けながら、後輩たちを支えていかなければならぬと思っております。

フォーラムでの新たな出会い

わたしたちは長いこと活動してまいりましたが、たとえば主婦でも、必要があった場合は現場で働くように、常に勉強を続けなければならないという思いで、年数回の研修を続けております。平成16年からは所属している日本女性薬剤師会が、家にいても、働きながらでも、勉強できる通信教育講座を始めていますので、できるだけ参加して継続的に勉強を続けるよう推進しています。現在会員の約3分の1が受講しておりますが、そのとき必ずスクーリングをしなければならないので、その会場としてエル・パーク仙台を利用しています。せっかく勉強したものはどこかの時点でみなさんにお返ししたいということで、いろいろ機会があるごとに努力しており、その一つの結果が、男女共同参画推進せんたいフォーラムです。ほかのグループの元気な活躍ぶりを見て、2010年に初めてフォーラムに参加して、身近な薬用植物をみなさんにつけてもらう活動と、それから健康に役立つ薬草茶の試飲コーナーを設けました。以後、毎年フォーラムに参加しております。

最後にみなさんには「1に運動、2に栄養、3に禁煙、最後に薬で健康管理を」、それから、お出かけになる際はお薬手帳を持参され、持病をお持ちの方は必ず3日分くらいのお薬を身につけてお出かけになりますようにお願いして、わたくしの拙いお話を終わりにさせていただきます。

「次の世代、その次の世代へ」

酒井 由布子（さかい・ゆふこ）さん 仙台石けんをひろめる会・代表

1975年の会発足から、合成洗剤追放と石けん使用を進める活動に関わり、年に3回の「石けんニュース」の発行や、男女共同参画推進せんたいフォーラム参加などの活動を継続している。原発問題、廃棄物問題、農薬問題などにも関心を持っている。



始まりは飲み水の問題

みなさまこんにちは。今日はエル・パーク仙台30周年記念のこのフォーラムに参加することができて、大変嬉しくありがとうございます。30年前にエル・パーク仙台が開館する前に、いくつものグループが仙台市にお招きいただいて、「市の婦人会館ができる、何か希望があるか」というお話をいただいて、「ああ、宮城県婦人会館はあったけれども、仙台市にも婦人会館ができる。ああ嬉しいな」という思いをしたことを、今思い出しております。

わたくしの、「仙台石けんをひろめる会」は、1975年に発足いたしました。その時代は、日本中何か公害が広がっておりまして、有機水銀の水俣病だと、大気汚染の四日市ぜんそく、それから鉱山のカドミウムのイタイイタイ病。あちらこちらに公害の広がりがあった時代に、わたくしの会が発足いたしました。その頃はちょうど、東京都の飲み水、都民の飲み水をつくる調布の浄水場に白い泡が溢れまして、その浄水場関係の方々がその泡のもとである汚染洗剤を飲み水から取り除くために、活性炭を入れて吸着させての、大変な苦労をされて飲み水をつくっていた、そういう時代でした。

そのうちに、その調布のお水を飲んでいる学校の子どもたちに、原因不明の熱病がちらちら出てきて、それでお医者さま方が協議をなさって、何が原因かさがして、結局調布のお水が共通点として残り、調布の浄水場は閉鎖されます。その泡のもととなった合成洗剤は、べつに工場排水ではありません。各家庭から一日30グラムか40グラム出される洗濯用の合成洗剤であったり、お台所で一振りされる合成洗剤だったりしたわけです。それが東京都民の飲み水をつくっているところを閉鎖に追い込んだ、そういう事態が出て、そのお水をつくっている方々にも危機感がありました。

それで主婦の会や消費者の会に、「合成洗剤を使わないで、すぐ分解する石けんを使ってください」という呼びかけがありました。その頃、日本の各地で大なり小なり、その飲み水の問題が出ていたのではないかと思われます。全国の水道労働

組合の方々が石けんで活動する小さな団体の連絡をとってくれることになり、今でも合成洗剤追放全国連絡会というのが、2年に一回、大きな集会をもつことになっております。今年は金沢でその全国の集会が行われました。

人間の命である水

東日本大震災からも5年と8ヶ月になります。熊本の震災から半年になります。この間は、鳥取で震災がありました。そういうときに用意しておくもの。ひとり一日3リットルのお水を、ヘルメットや懐中電灯や簡単に食べられるものも含めて、用意することになっております。人間の命にとって、やっぱり“水”というものは欠かせないものだということを、次の世代、次の世代にもきれいなままで残してあげたいなという思いで活動しております。

つい先日、11月17日にも、大学生や若い方々に、一日わたくしの活動を見ていただく会をいたしました。男子学生さんも女子学生さんもいっぱい来ていただいて、わたくしの年寄りの話を丁寧に聞いていただきましたので、幾つかはお水をきれいにする暮らしをしていただけるのではないかと思っております。

やっぱり、ここエル・パーク仙台での活動において横のつながりが大事で、その活動の延長として若い方々にも伝えていく。そういう活動をこれからも続けていければなと思っております。

「いのちを大切にする社会を手渡す」

酒井 文子（さかい・ふみこ）さん

みやぎ親子読書をすすめる会・代表 / みやぎ子どもの文化を支援する会・代表

1979年に「みやぎ親子読書をすすめる会」の会員となる。読み聞かせを定期的に開催するなど、子どもと本に関わる活動を続けている。東日本大震災発生後には、「みやぎ子どもの文化を支援する会」を設立・代表となり、支援活動を行っている。



仙台にやってきて

みなさま、こんにちは。みやぎ親子読書をすすめる会の酒井と申します。みやぎ親子読書をすすめる会は1971年に設立されて、もう40年以上、仙台を中心活動を続けている団体です。わたくし自身は、1963年に仙台にやってまいりまして、それから53年間ずっと仙台市民、仙台に定住しております。そのほとんどを太白区に住んでおります。太白区の長町に住んでおりました1977年、宮城県沖地震の1年前でしょうか。長町コミュニティセンターを仙台市で設置してくれるという情報がありましたので、図書室をつくってほしいという要望を、仙台市の方に出しましたら、それが叶えられまして図書室ができました。図書室の運営は地元のお母さんたちでということだったので、声を掛け合って、10名の図書委員会というのを立ち上げまして、長町コミュニティセンターの図書室の運営をやりました。

大きな転機となった出会い

本は仙台市民図書館から団体貸し出しを受けることになりましたので、仙台市民図書館にお話を伺いに行きました。その時に、東京の日比谷図書館から招かれて仙台に来て、仙台市民図書館の基礎をつくった、図書館の専門家の黒田一之先生という方に出会っていろいろ教えていただいたこと、それがわたくしにとってとても大きな転機になりました。それから、やっぱりその頃仙台市民図書館の職員だった野本和子さんという方が、退職をして子どもの本の専門店「ポラン」をオープンしました。野本和子さんにも絵本のことをたくさん教えていただきました。このお二人に出会ったことが、今のわたくしに、みやぎ親子読書をすすめる会をずっと続けてきたことにつながっているというふうに思っております。

わたくしが1963年に仙台に来たときは、知り合いも友人も親戚も、周りに知っている人が誰もいない寂しい状態といいますか、心細い状態でした。となりの山形県で生まれて、高校を卒業してから5年ほど東京で過ごしておりました。黒田先生と野本さんからいろいろ絵本のことを教えていただいて、素敵な絵本に出会い、絵本の良さ、絵本の魅力にとりつかれて、今に至っています。53年間仙台に暮らし、

市民活動に参加したおかげで、本当に信頼できる仲間、友達、友人にたくさん恵まれまして、今はとても幸せに暮らしております。

高齢者になりましたが、高齢者にとって大事なことは「きょういく」=今日行くところがある」「きょうよう」=今日用事がある」この二つだと周りの方から言われます。わたくしの場合は、毎日「今日行く」と「今日用」に事欠かないで、本当に恵まれた老後だと思っております。

活動の拠点に

みやぎ親子読書をすすめる会は、エル・パーク仙台ができる前から発足しておりましたので、それまでは活動の拠点というものが無くて、流浪の民と言いますか、会場を借りるためにあちに行ったりこっちにお願いしたりして苦労しておりましたが、1987年にエル・パーク仙台がオープンしてからはこちらを活動の拠点として、本当に充実した活動をずっと続けて来ることができました。何より定期的な活動ができるようになったことは、ありがたいことだと思っております。

今を生きる大人の責任

絵本というのは、とても奥深いものだということを、みなさんにわかっていただければいいなと思います。「子どもが読むもの」とどうしても思われるがちですが、やはり絵本は、おとなが子どもに読んであげるもの。それから、絵本にこめられた作者のメッセージを、読む人が子どもたちに伝えるということ。これがとても大事だと思います。

柳田邦男さんが「絵本は人生で三度出会う。一度は子どものときに周りの人から読んでもらう。二度目は親になったときに自分の子どもや周りの子どもたちに読んであげる。そして三度目は、高齢者になってから自分のために読む。」と話されておりますが、そのようにわたくし自身も思うようになりました。

そして、みんなでいのちを大切にする社会、平和で安全な社会を次の世代の子どもたちに手渡していくことの大切さ、それが今を生きる大人の責任だということをもう一度確認したいと思います。

受けとめ、つなぐ思い～話し手へのメッセージ

[皆さまへ]

- ・各分野で長い間活動しているグループに感動です。みなさんから、平和と安全を大切にすることの大切さをあらためて教えていただきました。
- ・全員、女性のパワーを感じました。女性って素晴らしい。

[天野 清子さんへ]

- ・女性が一人の人間として生きる権利は、先達の皆さんのが勝ち取ってきたものなのですね。いまだ道半ばではありますが、お話を聞いて勇気をいただきました。同じ働く女性として…。
- ・女性に対するジェンダーバイアスが今よりずっと強かった時代に確固とした信念を持ち、生き抜いてきたバイタリティに深く感銘を受けました。
- ・「女性だけが、自分の蓄積したものを活かせないのはおかしい」という言葉がとても響きました。全ての女性が、自分の“得手”を伸ばして生きていける社会になるよう、自分にできることを考えていきたいです。

[渡辺 紀さんへ]

- ・いつの時代も少女たちが夢をあきらめず、自分に自信を持ち、自分らしく輝けるよう声を上げ続けたいと思います。
- ・ガールスカウトの合い言葉「そなえよ つねに」は私の「いま」を支える土台になっております。
- ・ガールスカウトのキャンプ活動のお話から、女の子たちには工夫し、協力し合うたくさんの力があるということをあらためて感じました。私も自分で考え、物事を自分の意志で決定できる女性になっていきたいです。
- ・少女が自分に自信を持ち、自分らしく生きるよう育み、見守るーそれはとても大切な活動。その地道な活動を長年続けられていることに感動します。

[門井 和子さんへ]

- ・国際交流のボランティアに携わった背景に戦争の体験がのこと、お話ししてくださってありがとうございました。人

間が大好きというお人柄、普段の門井さんからも伝わってきます。

- ・門井さんは本当に「翼」のような方だと感じました。バイタリティのある生き方から勇気をいただきました。
- ・草の根の国際交流を気負わず、しかし強い思いで続けてこられたパワーと気概はすばらしいです。仙台の女性活動の先達のお話に力をいただいた思いです。

[佐川 美恵さんへ]

- ・多くの講座やイベントに託児がつき、文化施設に託児室が設置されるようになった今、その基礎を築いてくださったことに感謝します。生活者と政治の関わりはまだまだ不十分な状況が続きますが、とても大切なこと。いつも目を光らせ、声を上げ、語り合っていかなければならないと心に留めます。
- ・女性同士のネットワークを活用しながら、その時々に応じて、柔軟に様々な活動に邁進されている姿に、心を打たれました。
- ・エル・パークの存続を求める活動の時、施設の存在意義や男女共同参画とは何かを語り合ったというお話、とても心に残りました。女性たちの居場所をこれからも大切にしていきたいです。

[木村 さち子さんへ]

- ・女性たちの心の奥にあって絶対に忘れられないもの。貴重なお話を伺いました。平和で女性たちが安心して暮らせる社会をつくりたいです。
- ・historyの中で語られない her story の発掘・記録・出版による公表は素晴らしいことです。一人一人の大切な人生がなかつたことになってしまわないよう、語り継いでいかなければならないと改めて強く思います。
- ・戦争のこと、なかなか話したがらない方もいる中で、努力を続けられ、みなさんにお話を聞きつづけたということに、語り継ぐことの大切さ、戦争のことを忘れてはいけないということを深く心に感じました。二度と同じあやまちを繰り返したくない、という先達の思いを、私もつないでいく1人にならなければと受け止めております。

[三塚 雅子さんへ]

- ・女性たちをエンパワーメントする活動に力づけられた方々も沢山いらっしゃると思います。1.運動 2.栄養 3.禁煙 4.薬お薬手帳と薬3日分! 大切にします。
- ・“社会に貢献する”意識が家でも勉強し続ける、という強い気持ちにつながるのだと思い、今、自分にとっても心の支えの1つになりそうです。
- ・三塚さんのように、女性の社会進出のために、働く女性の一人として力を尽くしてくださった方がいらっしゃったからこそ、今の私たちがこうして働くことができているのだと実感しました。まだまだ女性が働き続け、活躍するための壁は多くありますが、三塚さんたちの思いも胸に、私も活動をつづけていきたいと思います。

[酒井 由布子さんへ]

- ・大切な環境を守り、次の世代に渡すため、女性たちが草の根で続けてきた運動を誇りに思います。女性たちがつながり、若い人に伝えていくことができるよう願っています。
- ・酒井さんからきれいな水と、次世代を思いやってくださる気

持ち。どちらもしっかり受け継ぎたいと思いました。

- ・ふだん私たちが安心して安全なお水が飲めるのは、歴史の中で酒井さんのように活動を続けてきてくださった方がいるからなのだと実感いたしました。公害のことなど、教科書でしか知らない世代なので、これからも若い世代へ元気に伝え続けていただきたいと思いました。

[酒井 文子さんへ]

- ・生きているってすてきなことがある。楽しいことがいっぱいあるんだよ。子どもたちにそう言ってあげられる大人、社会であります。
- ・エル・パークが多く活動の拠点となり、居場所となっていることがわかります。この場所の大切さを、本の大切さ同様、子どもたちに伝えていかなければ…と思いました。命の大切さとともに胸に刻みます。
- ・子どもたちに、絵本のすばらしさを伝える活動を長く続けられていることに感銘を受けるとともに、絵本の持つ力を教えていただきました。



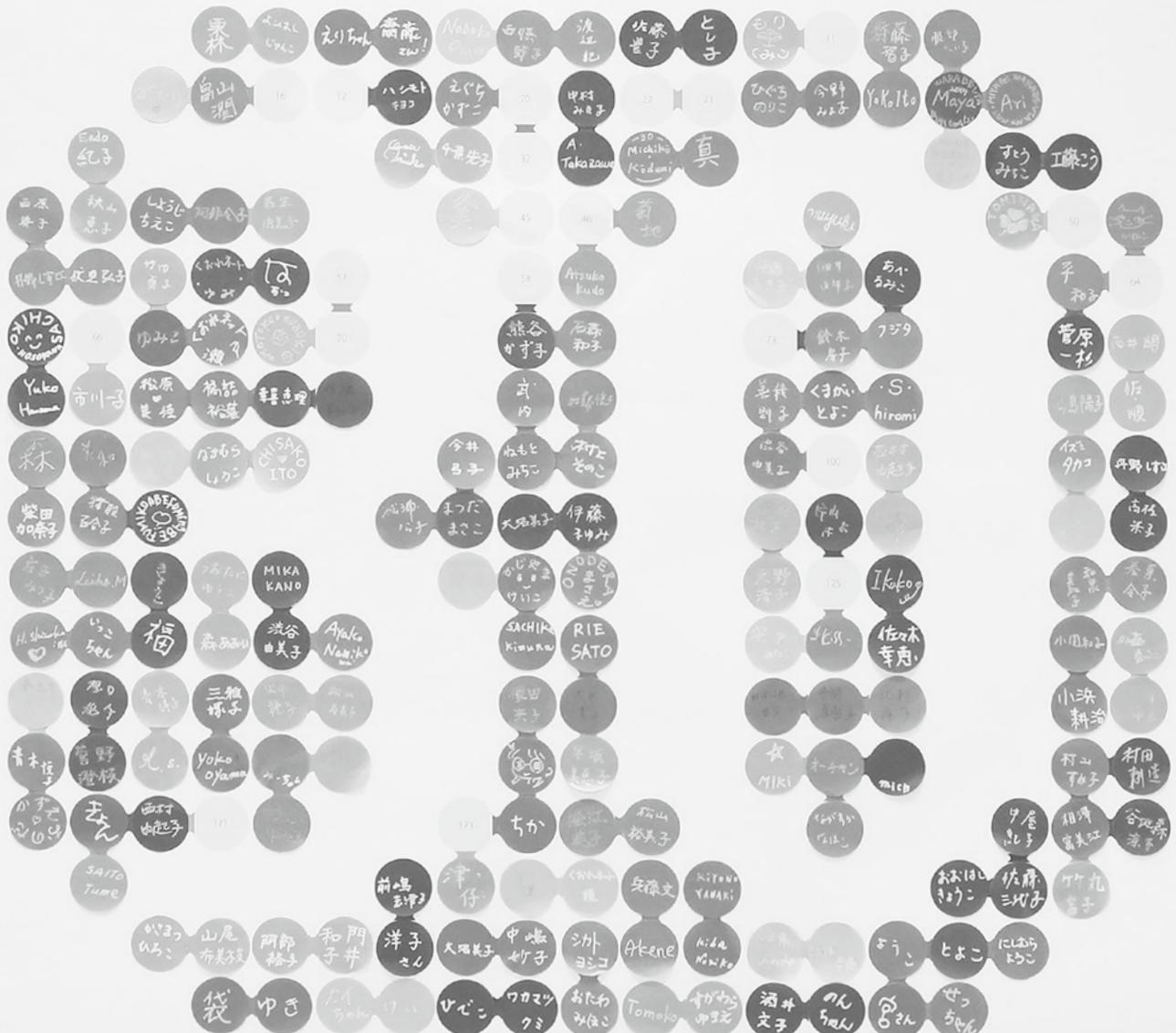
毎年、市民グループの「これを伝えたい！」がぎゅっと集まる。
「女たちのメッセージ」の頃も、今も。



男女共同参画推進せんたいフォーラム2016

平成28年11月17日(木)～20日(日)

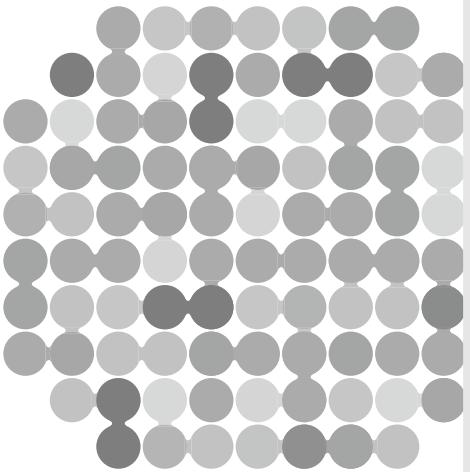




エル・パーク仙台30周年

2017.3.20

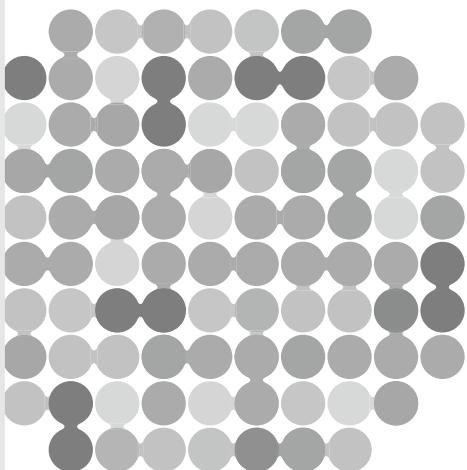
丸の一つひとつに利用者の名前を書いてもらい、大きなロゴポスターに

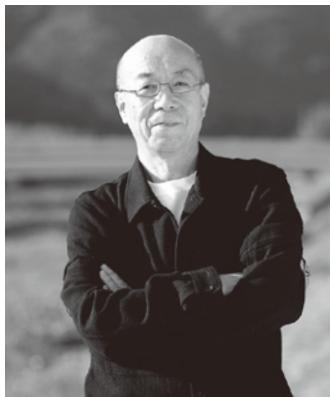


対談 鶩田清一×遠藤恵子

「足もとから未来志向。」

平成28年6月25日(土)
エル・パーク仙台 セミナーホール





鷺田 清一 (わしだ きよかず)

哲学者、せんだいメディアテーク館長、京都市立芸術大学理事長・学長。大阪大学教授・総長などを経て、現職。これまで哲学の視点から、身体、他者、言葉、教育、アート、ケアなどを論じるとともに、さまざまな社会・文化批評をおこなってきた。主な著書に、『「聴く」ことの力』(ちくま学芸文庫、桑原武夫学芸賞)、『「ぐずぐず」の理由』(角川選書、読売文学賞)、『しんがりの思想』(角川新書)など多数。現在「折々のことば」(朝日新聞)連載中。



遠藤 恵子 (えんどう けいこ)

(公財)せんだい男女共同参画財団アドバイザリーフェロー、東北学院大学名誉教授。同財団の理事長を平成13年4月から25年3月までの12年間務める。平成18年4月から26年3月まで山形県立米沢短期大学学長。専門の社会学の分野で、現代の家族、高齢社会、災害とジェンダー、社会における格差の問題等に関し発言を行ってきた。

エル・パーク仙台30周年を迎えるにあたって

遠藤 エル・パーク仙台は来年3月20日で30周年を迎えます。ですが、この30年、順調に歩んできたばかりではありません。今から10年ほど前、エル・パーク仙台の廃止を検討されたことがあるんです。その時にいち早く立ち上がったのは、この中にもきっといらっしゃいますが、女性の市民グループだったんですね。本当に短い間に1万4千人の署名を集めたんです。この30周年を迎えることができたのは、ここにいらっしゃる市民の皆様のおかげなんですね。いろんな施設がある中で、「市民のための」とはどこでも言うと思うんですが、このエル・パーク仙台はまさに「市民による」センター、なんですね。

そのエル・パーク仙台が30周年を迎えるにあたって、今日はぜひ、鷺田先生が男女共同参画30年の歩みをどんな風にご覧になっているか、お話をうかがえたらと思います。

鷺田 女性ばかりの集まりかと思ったら、男性がたくさんいらっしゃってちょっと落ち着いたんですけど。仙台に毎月通うようになって、もう4年目に入りましたが、メディアテークに来てくださるいろんな方とお話しする中で最初に驚いたのが、

NPOの活動がすごく地に足が着いているなあということ。強烈な印象がありました。そしてそれを担っている方に、女性が多くて、びっくりしました。仙台市の施設ですから、市の方ともよくお目にかかるんですが、幹部クラスに結構女性が多くって、それが、パパっと決断されるんですね。私は勝手に東北は寡黙で沈着な方が多いと思っていたら、とんでもない。独特のあっさりした感じとテキパキしたイメージが、それまで抱いていたものと違いました。京都は幹部女性もものすごく少ないので、とにかくその人当たりにびっくりしました。ところで男女共同参画が、政策として決定して、今もう何年ぐらいになるんですか?

遠藤 男女共同参画社会基本法という法律ができたのは1999年なんですね、政策はもっと前からなのですが。けれども本当にまだまだ浸透していないと思っています。

大学の中の男女比から見えること

鷺田 私たちが身を置いている大学について言うと、大学は学問の場ですから、そういう平等意識が高い、あるいは高くな

いといけないはずなんんですけど、やっぱり人事面では、国会議員とかと並んで、ものすごく遅れている組織だと思いますね。私がかつて国立の大坂大学の文学部にいたときも、そこはもう学生の過半数が女子だったんですけども、100人近い教授会のメンバーで5人しか女性の教員がいなかった。今勤めているのは京都の市立の芸大ですが、芸術系は圧倒的に女子学生が多くて85%超えるんです。全国の芸大に共通の傾向ですけれども、85%以上が女子で、音楽よりも美術の方に女子が多いんです。音楽の方はピアノとかバイオリンとか女性の先生が比較的多いんですけども、美術の教員はまだ数名です。そういった人事の面で、教育界、特に高等教育に関しては、学生の男女比と先生の男女比のアンバランスには、甚だしいものがまだありますね。

遠藤 学生の男女比でいうと、やはり文学部以外は圧倒的に男子が多いわけですか？

鷲田 必ずしもそうじゃなくって。例えば、薬学部は女性の方が多いかったです。工学部でしたら都市工学、都市計画とか、環境政策とかを研究する部門があるんですけども、そこも女性が多かった。それから医学部も多いですね。女子の方が成績が良いものですから。で、経済学部は案外女子が少ない。理由ははっきりしていまして、要するに大学出てからキャリアをどういう風に作っていくかを考えた結果なんですね。つまり女子の多い学部は職業に直結した免許や資格が取れる。例えば、医学部だったら医師免許、法学部だったら弁護士とか、文学部だったら教員とか学芸員がありますし。薬剤師だったら、薬局という風に。職業選択にすごく関わっている気がします。ところが、経済学部っていうのは、これ、という職業がないんですよね。だからほとんどの人が研究者になるか一般的の会社に勤めることになる。すると、むしろ弁護士さんとか、お医者さんとか薬剤師の方が男女問わず同じ働き方ができると。女子学生はそういうところにすごく敏感なんですね。本当に男女関わりなく同じように働ける場、あるいは働き甲斐のある職につながるような勉強をしたいというのが多分一番大きな理由じゃないかと思います。

遠藤 ということは、経済学部に女子学生が増えないと男女共同参画は本物じゃない、ということになりますね。

「ワーク・ライフ・バランス」—仕事が公で生活は私か

鷲田 それからもう一つ、男女共同参画を考えるときに「ワー

ク・ライフ・バランス」ということも言われてきましたよね。ワーク・ライフ・バランスっていう言葉は、大事だけれども結構誤解されやすい標語だったんじゃないかなあと私は思っていますね。職場の過労死が増えてきたこととか、あるいは家庭崩壊と言われるようなこととか、そういう背景があって、仕事と同じように個人生活あるいは家族生活をバランスよく大事にしようってことでワーク・ライフ・バランスが言われ出した。そして、例えば出産のとき男性も休みを取れるようにしようとか、家事を分担しあうということで、男女共同参画にも関わってくる非常に大事な標語だと思うんですけど、ワークとライフをワークは仕事だから公的なもの、ライフはプライベートな、個人生活とか家族生活、という、知らない間にそんなイメージができていた。そこに私はすごく抵抗があります。

ライフには、家族生活、個人生活ではない地域での地域住民としての生活もあるし、仙台だったら仙台市民としての暮らしというものがあって、日々の暮らしの中にあって、一人ひとり男女問わずいろんなレベルの役割があるのに、ライフっていうと、個人生活、家庭生活を大事にしましょうみたいな、プライベートが前面に出ます。でも私に言わせると、ワークだって私企業に勤めて、その会社の営業成績を上げ、利潤を上げることに、一所懸命やることを仕事と考えたら、こんなプライベートなことはないって思うんですよ。だから、仕事と暮らしのバランスを、公的な活動と私的な活動のバランスみたいにずらされていることにも抵抗があって。

仕事だって「会社のために」っていうのが過剰になってはいけないんで、自分たちの会社が今やっていることが本当にいいことなのかっていう目も持たないといけない。同じように、暮らし、生活、ライフって言うときも、家族や自分のことばかりじゃなく、地域のこと、社会全体のことを考える、そういうイメージを膨らましておかないと。というのも、いわゆるニュータウンって言われるところは、みんな鉄の扉の建物に、家族ごとに閉じ込めるっていうか、封鎖されてライフはその中にあるみたいな、閉じられたイメージになってしまいますよねえ。「個人の生活も大事にしましょう」って言うだけだったら、ちょっと趣旨が曲解されるんじゃないかと思うんです。家族のための時間と同時に、もっと公的な活動、市民あるいは地域住民としての活動にも、ちゃんと時間が取れるようにしましょうということを、言っていかないといけないと思います。

遠藤 閉じられた個人、家族の暮らしを大事にするのではなくて、そこから出て、ライフというのはコミュニティの中での生活、そのためだったらワーク・ライフ・バランスが必要という意味を込めて言うべきなのですね。

職と住が離れたことで生じた問題

鷲田 明治以降、労働は「勤務」という形態をとってきていて、働くイコールほとんどどこかにお勤めするっていうイメージになっていますよね。通勤っていうのは出稼ぎですよね、ある意味では。暮らしているとこから別のところに行く、それも、東京なんかだったら通勤時間に1時間半、2時間すらかかる。あれも私は出稼ぎだと思っていて。でも近代以前の、工場とか企業、会社ができる以前の労働って職住一致で、働いている場所が生活の場所だったし、働いている人が生活者、つまり夫だけが働くんじゃなくって、例えば家でお商売してらしたら、お父さんもお母さんも働くし、子供の遊び場も家の前とか同じところにあるし、ワークとライフが一緒で、離れてなかつたですね。あるいは今でも商店街とか農村でもそうだと思います。

みんなが働いて、子育てもみんなでやるし、しかも、家族だけじゃなしに。僕ら、親がいないときは隣の家でご飯食べさせられたりしました。だから、ある意味では仕事の大半が「通勤する」形になってから、ワーク・ライフ・バランスを言わないといけないようなことになってきたかなと。

遠藤 そうですね。まだもうちょっと先かと思うんですが、テレワークなどがもっと広がっていくと、かつてのようにワークとライフが同じ場という人たちも、今より増えていくかなって気はしますね。やっぱり、その時代の経済とか産業の仕組みによって、刻々と変わっていく面はあると思うんですよね。

鷲田 ちょうど30年前ぐらいに、都心の大きな企業も住宅の近くにサテライトオフィスを作つて、会社まで来なくてもそこで仕事ができるというのが少し始まりましたけど、あんまり広がらなかつたですね。

遠藤 そうなんですよ。やっぱり、いろんな企業のお偉いさんたちは、目の前で働いている人を時間管理しないと、働いてもらっている感じがしないのかなあと思うんですよねえ。

鷲田 それは、根本的に社員を信用してないってことですよね。

遠藤 ワーク・ライフ・バランスという言葉も、内閣府が最初に言い出して、あっちこっちの自治体でもどんどん言うようになったのですが、肝心のその役所が、全然できてないんですよね。ワーク・ライフ・バランスを言うのであれば、内閣府から是非率先して休暇を取らなきゃだめだと思うんですけどねえ。

男性が育児休業をなかなか取らないと騒いでいる、肝心の国の男性役人が、育児休業をガンガン取つてはいるかというと、全然取つてないんですよねえ。

複業と職住一致で労働のあり方を変える

鷲田 これは規模の大きい話にもなるので、難しくて時間もものすごくかかると思うんですけど、もう一回ね、働くことイコール一つの会社に勤めること、という今の就業形態自体を、見直していかないともたないんじゃないかと思うんです。就労に関しては若い人は逆境にあるんですけど、それを逆手にとって、これから仕事とか労働の形を変えていく。具体的に言えば、正規で働くのは難しいっていうのがまず根本にありますけど、もう一つ、うまく就職しても、もう完全に生涯一つの会社で働き続けるということが、だんだんノーマルなことではなくなつてくると思うんですよね。だから、いわゆる一つの会社に入つたらあとはもう安泰とは全然言えないし、そもそも、一つの会社の労働で暮らせるくらいの給料が、正規でももらえないということで、嫌でも小商いをいくつもせざるを得ない。今、複業っていう新しい概念がありますね。「複」って書いて、メインの仕事に対して、副業じゃなしに、一人の人間が三つとか四つ仕事をもつてこちよこちよ小商いでやるっていう。正社員の仕事がなかつたらバイトをいくつかやるとか、特に芸大の子なんかは、音楽や美術で食つてくのは、運のいい人でも10年先くらいですから、いっぱい小商いしているんですね。展覧会のパネルを作つたり、チラシを作つたり、自分の技を活かして小商いをいっぱいしてるんですよ。これも、「仕方なしに」って考えないで、労働の本来の形は一人の人がいっぱいやる複業じゃないかと考えてみる。

それから、もう一つは、通勤ですね。自宅から離れたところに勤務するから、結婚するときでも、夫婦どちらかの会社から遠く離れたら、別居や単身赴任しなければならないとかいうことになりますよね。しかも若い人たちは、就職前にそういう条件を先に出されたら、断る選択権がないという弱い立場にあると思うんです。これを裏返して、「お昼ごはんを家に帰つて食べられる距離でしか会社労働はしない」と決めるとかいうくらいに変えていかないと。今の若い人たちが、UターンとかIターンとか、じわりじわり着実に増えていってるのは、地方に移住するとまず職住一致になりますでしょう。それこそテレワークじゃないけれども、世界中といつでも繋がれるし、そして必要だったら都会に行って、そこで対面でいろいろ話して、作業はまた帰つてやるということができるので職住一致になります。

昔の農村部と一緒に、一つの農家がいっぱいいろんなことをする。本来農村っていうのは、お米も作るけれども麦も作るし、野菜も作るし、養鶏をして肉を売るし、油を作りますし、それからお茶も育てるし。家の普請をする、農家の大きな茅葺き屋根の葺き直しは一人じゃ絶対できないですからみんなで手伝うっていうふうにして、芝刈りもあるだろうし、いっぱい仕事をあるし。だから複業が当たり前だった。職住一致が当たり前、複業が当たり前って、逆転して考えるというふうに、労働のあり方自体を、時間をかけてでも変えていかないと、男女共同参画っていうのがほんとに具体化してかないんじゃないかなあって、私は思う。単に意識の問題だけではなくて、労働の仕組み自体を変えていかなくてはならないと思うんです。

社会の変化に合っていない日本のジェンダー

遠藤 もちろんそうですね。でも、複業の形じゃなくても男女共同参画が推進できている国は結構あるわけですよ。ノルウェーとかスウェーデン、デンマーク、フィンランドとか。ですから必ずしも複業だけがキーではないのかなという気はいたします。明治以降近代化したときに、効率化のために仕事は専門職、例えば工場だったら工場だけとか、あるいは大工さんだったら大工さんだけとか、複業じゃなく単業にすることによって効率を上げてきた。効率化、近代化という流れの中で、やっぱり男性が外で働いたほうが効率的にはいい、じゃあ家の中はどうするかといったら、女の人に任せればいい。そういうこととすごく関わっている問題だと思うんですね。で、いまその工業化というところから、さらにその次に進んで、今いわゆ

る知識産業になってきているわけですから。でも未だにね、日本のジェンダーは工業社会のままだと思うんです。本当は、産業構造は変わっているんだから、そっちのソフト経済のジェンダーに転換しなきゃいけないのに。それがジェンダー・ギャップ指数※が世界145か国中101位(2015年の順位、2016年は144か国中111位)というところに出ているのかな、と思うんです。

鷲田 今、我々の暮らしの基盤が完全に消費の形をとっている。貨幣経済でサービスを買うという形になっているのもすごく問題だと思うんです。それは確かに効率を上げるんです。すると例えば単身の人だったら、洗濯とか食事とか、そういう暮らしのベース、全部お金を払ってサービスを買うじゃないですか。そういう社会になってきていますよね。全部サービスに料金を払って、洗濯はクリーニング屋さんに、介護は介護施設に、子供は保育園にお願いする等々。実は都市生活というのは、生活の基盤は全部消費サービスを購入するという形できたんですね。それは確かに会社の仕事の効率化にはつながるし、それからもうひとつ、女性の家事労働からの解放にもつながる。

しかしこれはすごく大事なことだと私は思うんですけど、女性の家事からの解放というのが、消費という形をとったり、あるいはいろいろな電化製品ができる掃除が楽になったり、皿

※世界経済フォーラム (World Economic Forum) が毎年発表する、各国における男女格差を測る指標 (Gender Gap Index: GGI)。経済、教育、政治、保健の4つの分野のデータから作成される。



洗いしなくてよくなったり、そっちにばっかりいってきた。これがちょっといびつなんじゃないかと思っています。女性を家事から解放するために、一番誰でもすぐに思いつくのは、男が手伝う、一緒にする、シェアすることなのに、そっちにいかないで、電化製品開発、宅配の料理、外食、クリーニング屋さん、と便利なサービスを消費することになってしまった。でも今、そういうやり方での家事労働の軽減、解放が、UターンＩターンする人たちの中には出てきていて、嫌でも夫婦で、みんなでやるし、近所の人も一緒にそれに参入してくるという関係がある。だから私は、今若い人たちが、じわりじわりとUターンＩターンしているのは、単に都市から追い出されたというよりも、実際お金もないし、消費に依存しすぎる暮らしはできないということもあるんですけど、むしろ選んで都市から出る、脱出を考えることもできるんじゃないかと思うんです。

遠藤 私、「ジェンダー論講座」というものを担当しているんですが、その中ではやっぱり時々、男女共同参画を推進していくには、特に男の人たちのワーク・ライフ・バランスが必要だという文脈で、よくワーク・ライフ・バランスという言葉が出てくるんですが、これからは、ここまで鷲田さんがおっしゃったようなことを念頭に置きながら、お話ししないといけないですね。労働のありようを見直すことも考えながら、掘り下げていければと思います。いろいろな視点をいただきました。ありがとうございます。

女性たちのリーダーシップ

鷲田 今回、財団のいろんな資料を読ませていただいて面白かったのが、昨年、国連防災世界会議が仙台がありましたけど、そのとき開かれていた、防災と女性の役割、あるいは女性たちのリーダーシップについてのトークイベントの報告です。私は防災が男性・女性の問題と関わるとは思っていなかったんです。女性問題はどうして防災の問題に関わるんだろうと思って、この報告書を読んでいたら、いろいろと腑に落ちるところがありました。要するに女性たちの、平常時、何もない時には隠れている、あるいは隠されている能力、活動、素質みたいなものが、こういう非常時にはぐっと前面に出てくるということが書いてあった。そういう視点から、男女共同参画と防災の問題との関わりを考えると、女性たちの普段隠されている能力って、男女共同参画ではない社会の中で、夫は会社勤めでへたへたになって帰ってくるから、それ以外の家族や地域での暮らしの全部、女性がありとあらゆるものを一手に引き受ける役をやらされてきたからという面が大きいと思う。実際に

は、災害が起きた時に地域のネットワークにアクセスできるのは女性ですしね。それから避難生活の中で、ものすごく小さなことで口に出せないようなこと、いろんな下着とかトイレの問題とか、あるいはお年寄りや子供、赤ちゃんの問題とか、そういうところにスッと目が行き届いているっていうのが、実は防災、それから災害後のいろんなケアの中でものすごく大事で、そういうことも女性の活躍が大きかったと書かれているんですが、そこも大きな発見でした。

もう一つ面白かった、「なるほど!」と思ったのが、リーダーシップの大事なこととして言われている、まず納得しないといけない、納得したことはちゃんと続けられるということ。これがひとつです。それから楽しんでやれること、とも書いてあるんですよ。楽しんでやれることでないと続きません。そして最後に、何にも脅かされないっていう安心感、何を言っても絶対咎められない、どんな突飛な意見でもまずはいたん聞いてもらえ、頭からガンと拒否されるんじゃない安心感、その中で活動ができないといけない。納得するまでちゃんと考えて、話し合って、動けということ、楽しみながらやれということ、そして安心感。この三つってすごく大事なことを言ってらっしゃると思いました。

遠藤 災害と男女共同参画に関連して、やっぱり震災のとき、先ほどお話にあったトイレのことや、女性のニーズのお話もありますし、二重三重に、女性被災者には困ったことがあったんですね。性犯罪も増えたりしましたし。これは、避難所などに女性のリーダーが非常に少なかったということが背景にあります。男性目線でしか、支援や避難所の運営を考えられなかつたので、これからはもっと女性のリーダーを増やさなきゃいけない、ということで市民グループの中には、100人を目標に女性防災リーダーの育成をやっている団体もあります。

震災後、私どもがつくづく感じたのは、普段男女共同参画ができるいなければ、震災だからいきなり、それっ!とは、いかないということ。普段できないことは、災害のような非常時にはなおできない。だから、男女共同参画っていうのは、災害のときだけやればいいことじゃなくて、普段から実践していなきゃだめだねっていうことを私どもの合言葉みたいにして、30周年を経たこれからに向けた一つの指針にしているんです。

最後に—それぞれの原体験

遠藤 最後にうかがいたいのはですね、ご自身についてことで、小さいとき、まだ学校に入る前くらいの思い出で、一番心

に残っているのはどんなことですか？

鷺田 良いことですか、悪いことですか。

遠藤 どちらでも。できれば悪いことの方を。

鷺田 ああ、一番突出して辛い思い出は、母親がカリエスで、僕の幼稚園から中学ぐらいまでずっと臥せつてたんです。寝たきりで、母親の母親が看病と家事をしに来てくれていた。斜め向かいの家におじいちゃんが一人で住んでいたんですけど。あるときね、そのおじいちゃんに母親が正座させられていて、何も嫁としてやらへんよってね、火箸を投げられていた。おばあちゃんは黙って耐えてて。それに対して親父が何も言わなかったことに、いまだに腹立つ。だから父親とおじいちゃんを恨んで、「本当に許せん」とあの時は思いました。でも、そんなこと平気でやってたんですかね、昔の男って。一回寝ている母親が蹴られているのを見ました。あれだけは絶対忘れられん。何を偉そうにできるんやろと。悲しい思い出ですが。僕結構、切ない生涯を送っている、暗い人間なんです。違います、哲学は明るいです。明るい哲学を目指しています。

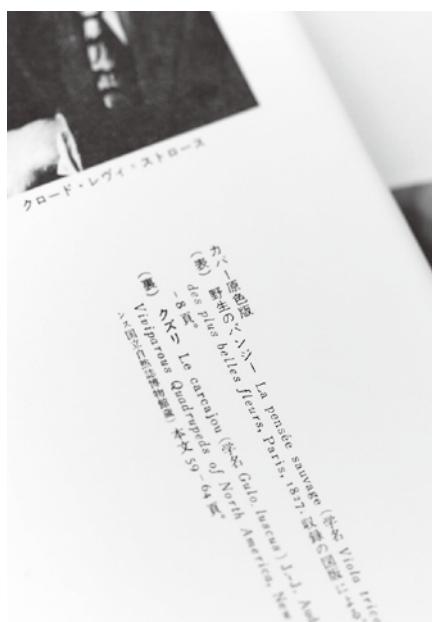
遠藤 でも、全然そんな風にお見受けしないものですから、辛いことを思い出させてしまって申し訳ございません。

私の幼少の思い出は、1歳半頃のことなんですが、私戦時

中の生まれなもので、1歳半でも強烈な思い出だったので。それは戦争の思い出です。戦争の末期だったんですね。私は仙台で生まれたんですが、疎開して陸前高田というところに住んでいたんです、あの「奇跡の一本松」の。そんなところにまで空襲があったんですね。軍隊の施設はなかったんですが、県立の大きな病院があったからだと思うんですが。

ここは防空壕なんかいらないと考えていたんだと思うんですが、防空壕すらもなかったものですから、空襲があったときに、押入れの中に逃げ込んだ。母とか祖母とかが必死の顔をしてね、私を連れて押入れの中に、汗だくになって。夏の暑いときです。親とか大人がこんな必死な顔をしたのを、生まれて初めて見たと思って、戦争の忘れられない思い出です。鷺田先生が生まれる前の話です。

遠藤 本当に時間がいくらあっても足りないほどですけれども、長時間にわたり、ワーク・ライフ・バランスの考え方から労働のしつみ自体を変えること、女性と防災など、私どもが男女共同参画を進めるうえで、大変示唆に富むお話をありがとうございました。これからエル・パーク仙台30周年を迎えるにあたり、さらにそこに続く未来に向けて、今日のお話からいろいろなヒントをいただいたように思います。鷺田先生を、エル・パーク仙台30周年を記念するこの場に、ゲストとしてお迎えできましたこと、とても嬉しく、重ねて感謝いたします。本当に、どうもありがとうございました。



鷺田先生は、財団発行の冊子『パンジー』にもふれてくださいました。『パンジー』は、東日本大震災後の女性たちが「どんな思いに突き動かされて」活動を続けてきたのか、お伝えしている冊子です。

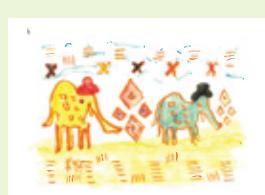
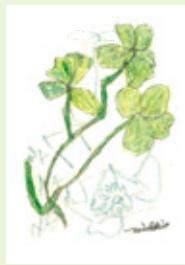
「パンジーって三色すみれなんですが、フランス語ではパンセって言って、パスカルが書いた本の『パンセ』、思考、思想と同じ言葉なんです。パスカルがヨーロッパで一番好きな思想家なので『パンジー』というタイトルを見た時には『あーっ!』と。うれしかったですね。」「人類学者レヴィ=ストロースの、世界的に話題になった『野生の思考』という本も、原題のパンセ・ソバージュは“野生の三色すみれ”という意味もあるんですよ」と。

パンジーはパンセ。3月11日の誕生花であるパンジーをタイトルとした意図を、再確認できた鷺田先生の言葉でした。

にじいろノート挿絵原画展

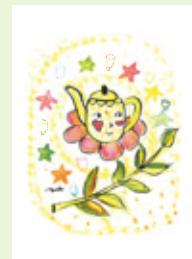
平成28年8月1日(月)～9日(火)

エル・パーク仙台 創作アトリエ



「にじいろノート～イマドキ男女平等」

せんだい男女共同参画財団の若手職員による、
河北新報夕刊連載コラム
平成27年8月3日から平成28年7月25日 全45回
挿絵 伊藤美智子氏



一人ひとりのエンパワーメントの拠点として
歩み続けるエル・パーク仙台。
これからも ともに。

さあ、その先へ！

「人間の力で世界を変える」
「人間の力で世界を変える」



エル・パーク仙台開館当時



市民活動の様子を伝える写真も

エル・パーク仙台 5階エントランス

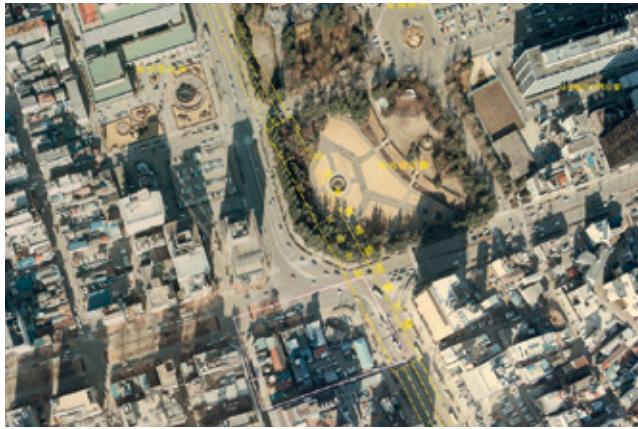


丸の中に約400の市民グループの名前が



男女共同参画の取り組みを年表に

男女共同参画とエル・パーク仙台のあゆみ



再開発事業前の一一番町四丁目第一地区 1981.12.22 [株式会社一・四・一 提供]



仙台市婦人文化センター「エル・パーク仙台」開館 [仙台市政だより 昭和62年4月15日号／新聞記事 河北新報社 提供]



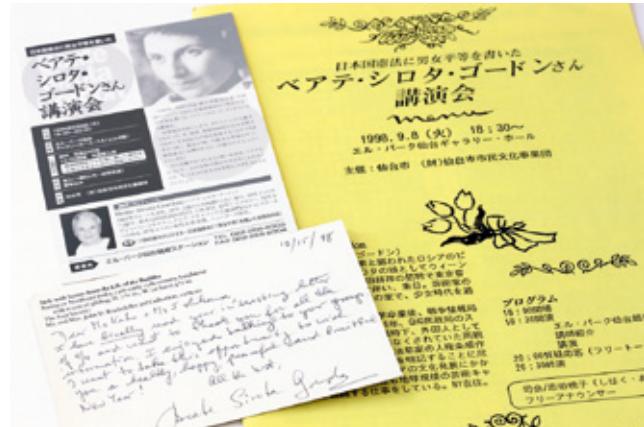
エル・パーク仙台開館記念イベント「女たちのメッセージ'87」



141 ビル外観（エル・パーク仙台開館当時）



「女たちのメッセージ」



「ベアテ・シロタ・ゴードンさん講演会」1998.9.8

仙台市の動き

仙台市の動き	世界・日本の動き
1978 ・宮城県沖地震	1975 ・国際婦人年 ・国際婦人年世界会議(メキシコシティ) 「世界行動計画」採択
1981 ・(仮称)仙台市婦人文化センター建設検討	1977 ・国立婦人教育会館(ヌエック)開館
1983 ・「(仮称)仙台市婦人文化センター建設基本計画」策定	1979 ・国連「女子差別撤廃条約」採択 1980 ・第2回世界女性会議(コペンハーゲン)
1987 ・仙台市婦人文化センター「エル・パーク仙台」開館	1981 ・(仮称)仙台市婦人文化センター建設検討
1991 ・「仙台市女性行動計画」策定	1983 ・「(仮称)仙台市婦人文化センター建設基本計画」策定
1995 ・仙台市「女性センター建設計画」発表 女性センター等基本構想委員会設置	1985 ・第3回世界女性会議(ナイロビ) ・「男女雇用機会均等法」公布 ・「女子差別撤廃条約」批准
1996 ・仙台市女性センター等基本構想検討委員会 「仙台市女性センター・子どもセンター(仮称) 基本構想」を市長に答申	1994 ・第1回国連防災世界会議(横浜市)
1998 ・仙台市が女性センター建設計画を凍結 ・「男女共同参画せんたいプラン —男女平等のまち・仙台をめざして—」策定	1995 ・第4回世界女性会議(北京) 「北京宣言及び行動綱領」採択 ・「育児・介護休業法」公布
2001 ・財団法人せんたい男女共同参画財団設立 エル・パーク仙台の管理運営を受託	1996 ・男女共同参画推進連携会議 (えがりてネットワーク)発足
2002 ・仙台市ジェンダーフリー推進協議会が 「(仮称)女性センター基本構想について」提言 ・「男女共同参画せんたいプラン」一部改定 ・「(仮称)男女共同参画センター基本計画」策定	1999 ・「男女共同参画社会基本法」公布 2000 ・国連特別総会 「女性2000年会議:21世紀に向けての 男女平等・開発・平和」(ニューヨーク) ・「男女共同参画基本計画」策定
	2000 ・「ストーカー規制法」公布 ・「児童虐待防止法」公布
	2001 ・「D V防止法」公布



スピーチテーブル「グロ」



「3.11を語る女性の集い」2011.7.6



日本女性会議2012仙台 閉会式 2012.10.27 仙台国際センター



第3回国連防災世界会議 パブリックフォーラム「女性と防災」テーマ館 2015.3.14-18



第3回国連防災世界会議 パブリックフォーラム「女性と防災」テーマ館 2015.3.14-18



エル・パーク仙台30周年記念ポスター

仙台市の動き

世界・日本の動き

2003 ・「仙台市男女共同参画推進条例」公布

- ・エル・ソーラ仙台開館
- 仙台市男女共同参画推進センター
- 2館体制スタート

2004 ・「男女共同参画せんせいプラン2004」策定

- ・せんせい男女共同参画財団が
- 仙台市男女共同参画推進センターの
- 指定管理者として2館を管理運営

2005 ・スピーチテーブル「グロ」がエル・パーク仙台に

2005 ・第49回国連婦人の地位委員会

2006 ・仙台市行財政集中改革計画に基づき

「北京+10」(ニューヨーク)

- 男女共同参画推進センター施設の見直しに着手

・第2回国連防災世界会議(神戸市)

2007 ・エル・パーク仙台開館20周年

・「第2次男女共同参画基本計画」策定

2009 ・「男女共同参画せんせいプラン

〔2009—2010〕」策定

- ・政令指定都市初の女性市長誕生

2010 ・第54回国連婦人の地位委員会

「北京+15」(ニューヨーク)

・「第3次男女共同参画基本計画」策定

2011 ・東日本大震災の影響により

2011 ・東日本大震災 発災

エル・パーク仙台及びエル・ソーラ仙台が休館

- 施設の見直しによりエル・ソーラ仙台を改修
- ・「男女共同参画せんせいプラン2011」策定

2012 ・「日本女性会議2012仙台」開催

- ・ノルウェー王国の支援により「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金」設立

2013 ・仙台市地域防災計画全面修正

災害時に仙台市男女共同参画推進センター内への
「女性支援センター」の設置が規定される

2015 ・第3回国連防災世界会議において

2015 ・第3回国連防災世界会議(仙台市)

エル・パーク仙台がパブリック・フォーラム

「仙台防災枠組2015—2020」採択

「女性と防災」テーマ館に

・第59回国連婦人の地位委員会

「北京+20」(ニューヨーク)

・「第4次男女共同参画基本計画」策定

2016 ・「男女共同参画せんせいプラン2016」策定

2017 ・エル・パーク仙台開館30周年

エル・パーク仙台30周年記念事業概要

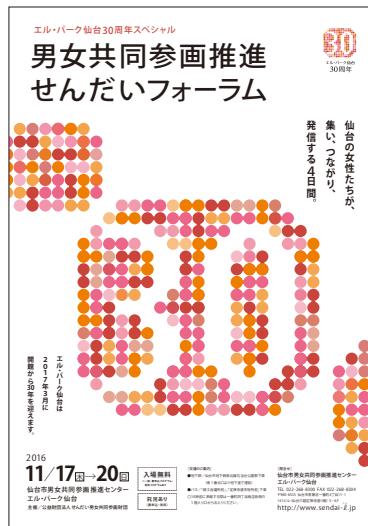


2016 6/25

[対談] 鷺田清一×遠藤恵子 参加者130名
「足もとから未来志向。」

2016 8/1～9

[関連企画]
にじいろノート 挿絵原画展



2016 11/17～20

エル・パーク仙台30周年スペシャル 参加者1,100名
男女共同参画推進
せんたいフォーラム2016



2017 3/20

エル・パーク仙台30周年記念イベント 参加者73名
さあ、その先へ!

[ドキュメント映画]

「何を怖れる 参加者73名
フェミニズムを生きた女たち」

[トーク] 「さあ、その先へ!」 参加者150名

交流会 参加者63名

エル・パーク仙台 30周年記念誌

2017年8月発行

公益財団法人せんだい男女共同参画財団
〒980-6128
仙台市青葉区中央1丁目3-1 AER29階
TEL 022-212-1627
FAX 022-212-1628

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町4丁目11-1
141ビル(仙台三越定禅寺通り館)5・6階
TEL 022-268-8300
FAX 022-268-8304

エル・ソーラ仙台
〒980-6128
仙台市青葉区中央1丁目3-1 AER 28・29階
TEL 022-268-8041
FAX 022-268-8045

